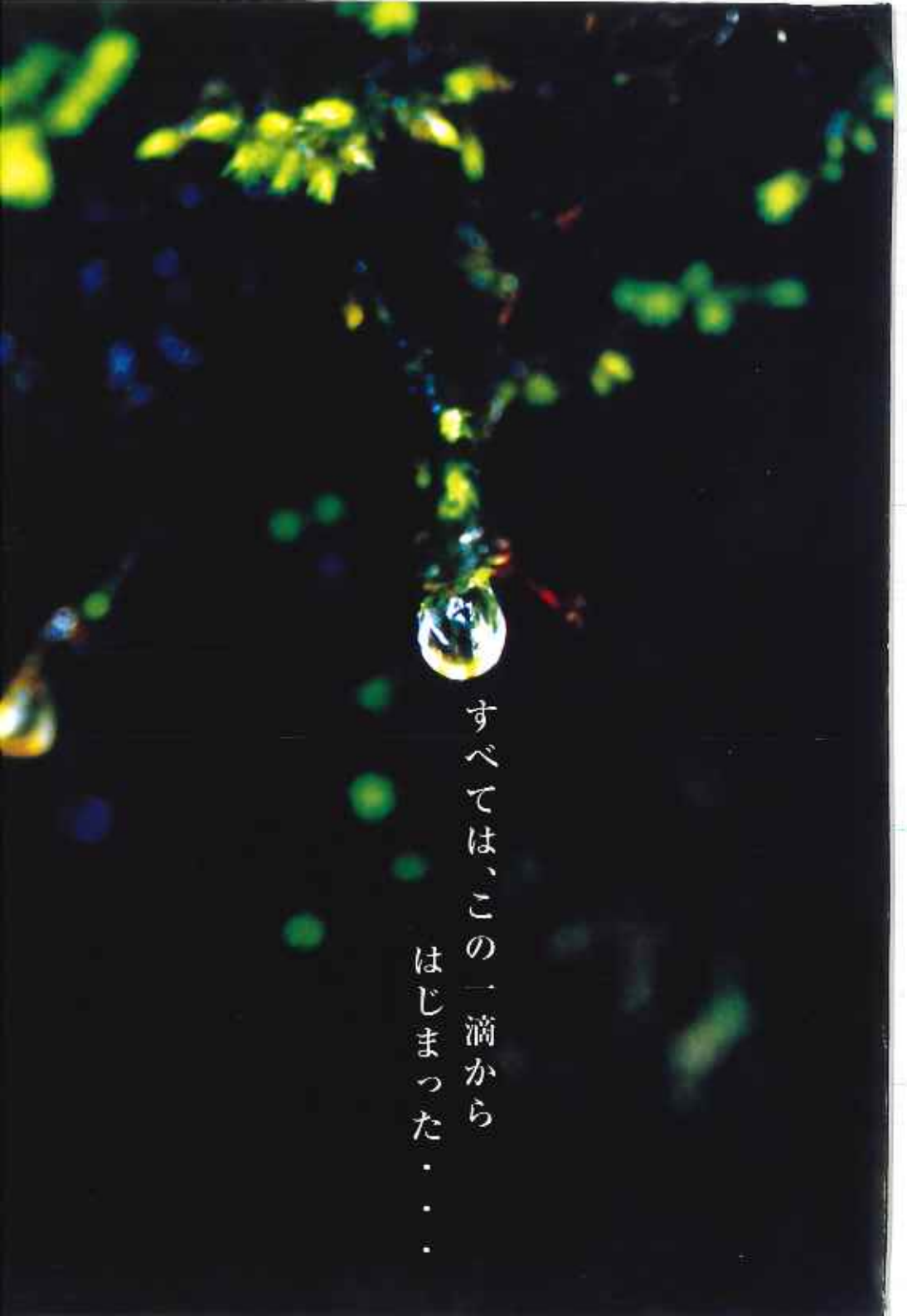
Kosuge Village, Yamanashi Prefecture

多摩川源流研究所 15年間の歩み

2001 − 2016

多摩川源流研究所
山梨県 小菅村


すべては、この一滴から
はじまった・・・・

Kosuge Village, Yamanashi Prefecture

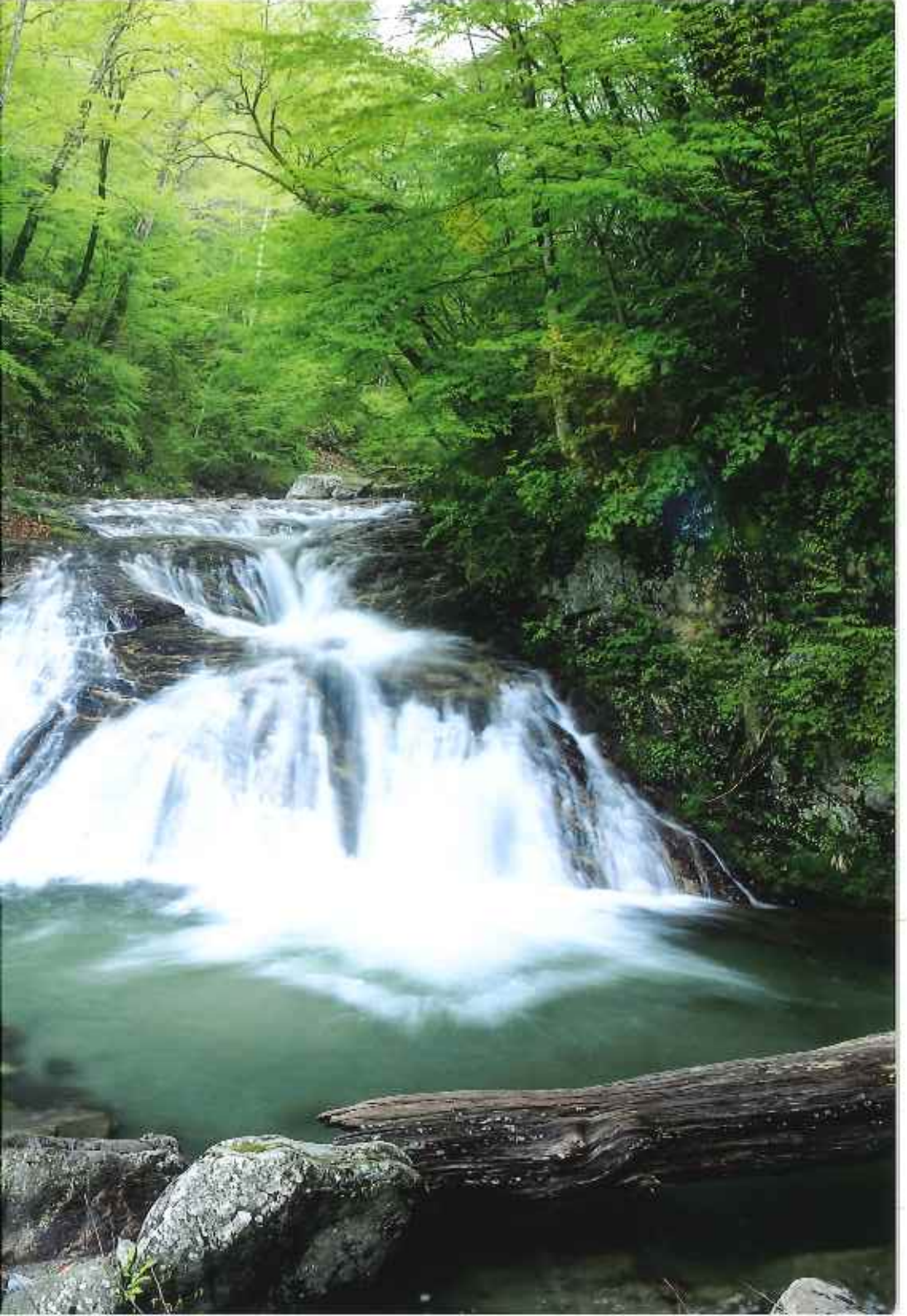
多摩川源流研究所
15年間の歩み

2001 − 2016

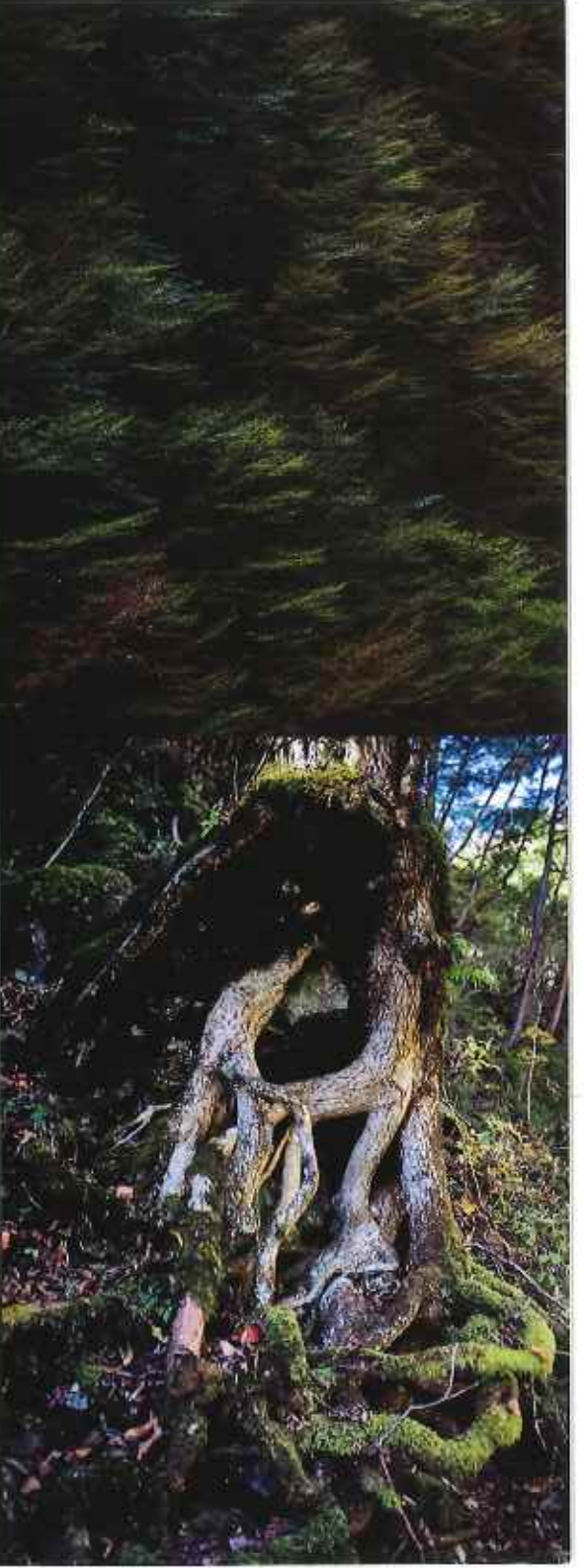
源流の魅力と価値
その可能性の探究

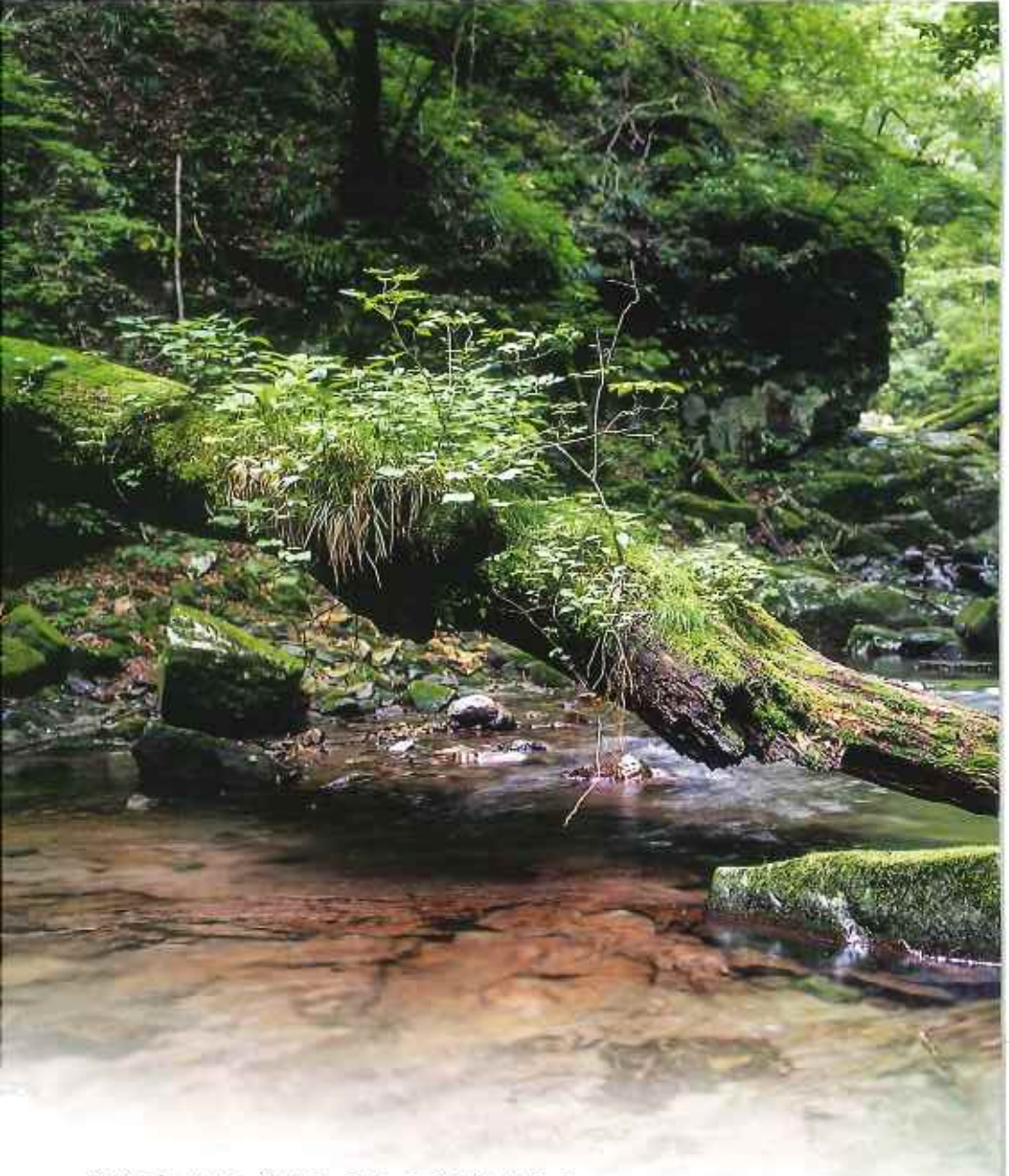
多摩川源流研究所が
守ってきたこと…

ここには、
15年前から変わらない
風景がある

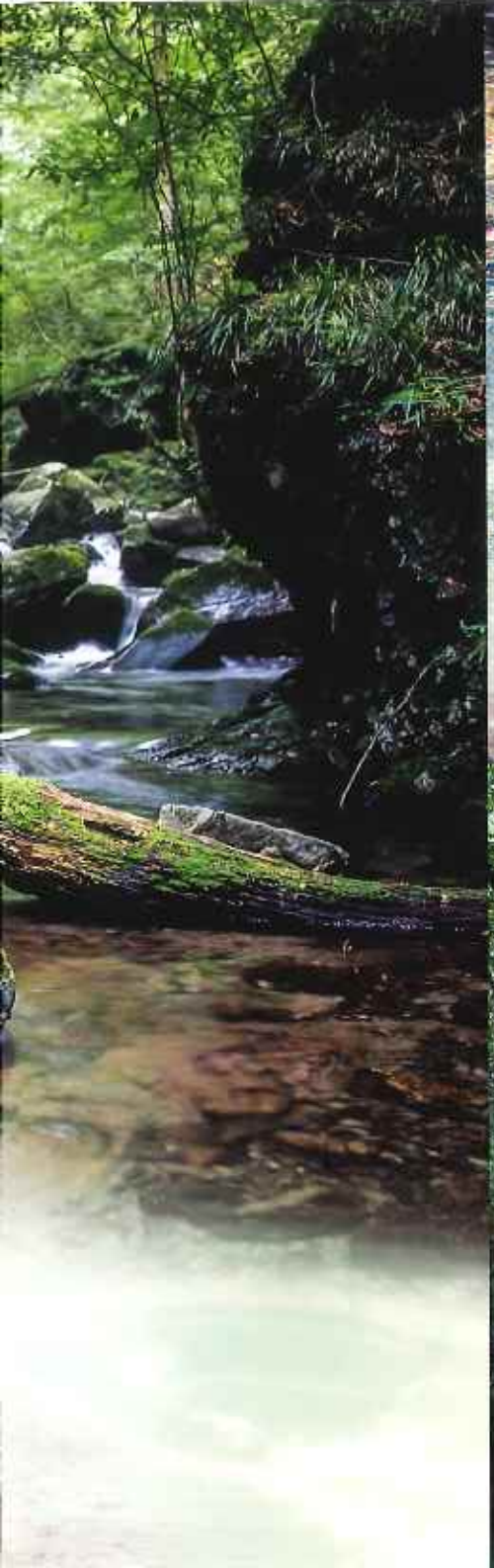


豊かな森が、
清らかな水をはぐくむ





源流より湧き出る清流が、
森を育む



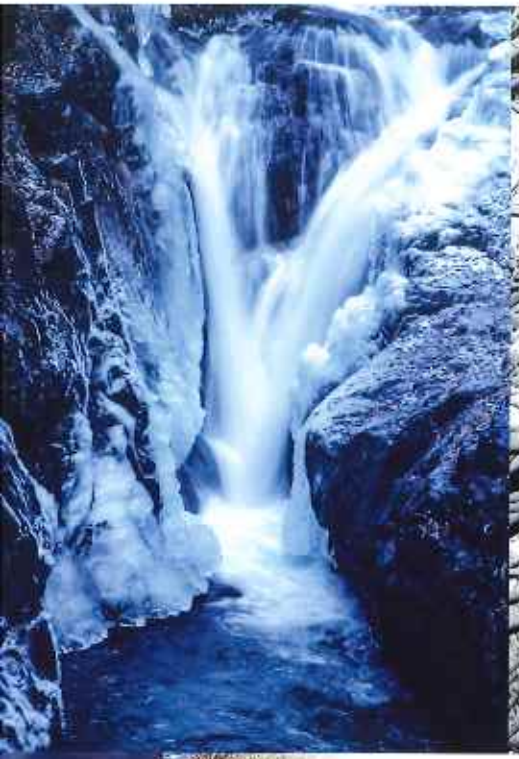
森と水、お互いが循環し、
源流域の自然は営まれている

四季の移り変わりと共に、
表情を変える源流域の自然

ときに、厳しく、ときに、穏やかに…

豊かな自然の中の、
いのちたち

実りの鮮やかな色彩はやがて、
冷たく静かな雪と氷の世界へと、



眠りから目覚めると、
いのちはまためぐっていく…

私たちは、
この変わらない自然を守っていく
未来のために、これからも

contents

多摩川源流研究所
15年間の
歩み

挨拶	**2**
多摩川源流研究所所長　中村 文明	2
小菅村長　舩木 直美	6
寄稿文	**8**
石川 重人	8
石坂 真悟	9
豕瀬 充	10
金尾 健司	11
黒川 文一	12
坂口 泰一	13
佐藤 寿延	14
佐藤 英敏	15
菅原 泉	16
鈴木 眞智子	17
田中 喜美子	18
豊田 庄二	19
宮林 茂幸	20
望月 徹男	21
矢野 公明	22
多摩川源流研究所について	**23**
15年間の歩み	**29**
4つの主な事業	**37**
源流絵図	38
源流体験教室	80
緑のボランティア・森林再生プロジェクト	99
「全国源流ネットワーク」づくり	120
その他の活動紹介（一部抜粋）	**127**

多摩川源流研究所 15年の活動の歩み

多摩川源流研究所 所長 中村 文明

多摩川源流研究所設立を遡ること7年。1994年7月18日午前10時に私は竜喰谷に入りました。この多摩川源流との出会いがなければ源流絵図も生まれず、多摩川源流研究所にも関わることはありませんでした。その竜喰谷には出合いの滝、下駄小屋の滝、箱淵、やまめ淵など無数の滝や淵が存在していました。地元の長老からそれぞれの地名にはそれぞれのいわれがあり、精錬場の滝は竜喰金山が滝の周辺にあったことからこの名前が付いたと聞きました。長老達の話は驚きの連続でありとても新鮮でした。70代、80代の長老達の頭の中にしか滝や淵の名前は残されていない。長老達がいなくなると名前を知っている人達が消えてしまう、何とかして記録して次の世代に残したいと思い「多摩川源流絵図塩山丹波山版」を作りました。5年間で120回ほど源流を歩き、長老から繰り返し話を聞き、現場を確認して実踏調査を繰り返し報告書をまとめました。文字だらけの記録集を残しても自分の思いは伝わらないと考え「多摩川源流観察会」の協力を得てカラーの「多摩川源流絵図」を作りました。新聞等のマスコミが源流絵図の完成を大きく報道してくれたことで、山梨県河川課が動き出し、県の予算で源流絵図を印刷していただけることになりました。

願ってもないことでした。当時は源流という言葉も、多摩川源流が山梨県にあることもほとんど知られていませんでした。この絵図は多摩川源流の素晴らしさを流域の人々に知ってもらえる良い機会になるし、目に見える形になれば子ども達にも源流のことを伝えることが可能になると考えました。源流絵図を印刷して世に出していくという山梨県の決定と援助が私の人生を大きく変えていくことになりました。

出来上がった源流絵図を山梨県下の小学校・中学校全てに配布しました。その後、丹波山村の守屋村長と小菅村の廣瀬文夫村長に手渡しました。小菅

村では絵図を開いた村長はビックリした様子でした。というのも絵図の中に小菅村が載っていなかったのです。廣瀬村長は「中村さんいいものが出来ましたね。ご苦労さんでした」と丁重な挨拶の後やや語気を強めて「これで終わりではないですよね。小菅村の絵図も作っていただけますよね」と念を押されたのです。これが小菅村との初めての出会いでした。

多摩川源流研究所は2001年(平成13年)4月8日に多摩川源流小菅村によって設立されました。

源流研究所は第一に源流資源の調査・研究、基本的データの蓄積、第二に「源流の四季」の発行など源流の情報の発信、第三に源流と中下流域との交流の推進、第四に森林再生プロジェクトの推進、第五に源流ネットワークの形成など5つの分野の活動に取り組んできました。

その具体例を簡単に紹介すると、源流大学と協働で行った資源調査に関しては、小菅村に250本の巨樹・巨木が存在することが確認されたこと。急峻で調査不能な箇所も多いので実際はこの数字より遥かに多いと思われますがこれほど多くの巨樹・巨木が確認できたことは地元住民によって、さらに東京都水源林としてまた山梨県有林として大切に守られてきたことの証であると思います。

情報の発信については、発行した「源流の四季」を流域の市町村に郵送したところ、配布先で積まれたままで読まれていなかったことが分かり、小菅村と源流研究所で直接各市町村を訪れて手渡しすることにしました。その結果、両者の結びつきが緊密になり流域に小菅村の存在を大きくアピールするきっかけとなりました。

上下流交流の柱は夏に実施している「源流体験教室」です。中下流の「水辺の楽校」を中心に大勢の子ども達がありのままの源流を知る重要な機会となったと思います。未来を担う子ども達の心にこそ「源流」の姿を刻んで欲しかったのです。

森林再生プロジェクトについては、流域の市民に呼びかけて、ボランティアでスギやヒノキの間伐を行うというもので、東京農業大学による科学的な森林調査の上に、流域の市民ボランティア、森林所有者、森林組合、小菅村・源流研究所が連携したこの取り組みは大きな反響を呼び、社会的な評価も高まりました。そもそも山の手入れをするためには「作業道」が必要です。それも安価で壊れない道づくりが大事です。壊れない道作りのために研修会を実施し、

全国の作業道の事例調査も行い、現在企業と連携して小菅村にも作業道の開設が進んでいます。

源流ネットワークの形成については、それまでは参加していなかった「多摩川流域懇談会」に源流から市民代表として加わり、いい川づくりの一翼を担いました。また、源流域の4市町村を束ねる「多摩川源流協議会」を立ち上げ、シカの食害とその実態調査を実施して多摩川源流の豊かな森づくりへ政策提言してきました。また、国の支援で行った「国土施策創発調査」に取り組み、全国各地の源流を歩いて源流を守るための連携を強め、政策提言を目的に「全国源流の郷協議会」を小菅村とともに立ち上げ、現在、加盟市町村も徐々に広がってきています。

源流を守るためには源流に住む人々を元気にし、山を元気にする。そのために先ず、「源流」という存在を多くの人々に知ってもらう。そこから始めた活動ですが、この15年間で大きく歩みを進めることができました。さらに「源流」の持つ価値と役割が正しく評価されるまで未来に歩みを繋げていきたいと思います。

多摩川源流研究所の設立当初より大変お世話になった東京農業大学の宮林茂幸教授、東京大学名誉教授の高橋裕先生をはじめ、ご支援・ご協力をいただいた全国の大勢の方々、「源流研究所15年史」を提案していただいた船木小菅村長に心より感謝申し上げます。

そして、緑のボランティアや森林再生プロジェクトを始め、源流研究所の様々な取組みに御尽力頂き、2019年12月8日にご逝去された東京農業大学の笹原泉教授のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

多摩川源流総合研究所設立準備室
(2000年)
右：廣瀬文夫村長(当時小菅村村長)
左：中村文明所長

多摩川源流研究所設立記念式典
(2001年)

多摩川源流研究所 所長 中村 文明（なかむら ぶんめい） プロフィール

●略　歴

昭和22年10月30日生まれ　宮崎県東諸県郡高岡町出身	
中央大学　法学部卒業	
中村英数塾経営	1983年から2001年2月まで
塩山市教育委員会・大藤公民館主事	1987年から2000年3月まで
多摩川源流観察会　会長	1994年12月7日　多摩川源流観察会を結成
多摩川源流研究所　所長	2001年4月8日　初代所長に就任
全国源流ネットワーク代表	2002年5月25日　全国源流ネット設立
多摩川流域ネットワーク代表	2009年4月
全国源流の郷協議会事務局	2005年11月

●主な活動歴

テレビ朝日	探検王国　源流の達人として出演	1996年9月1日
NHK甲府	「多摩川源流を訪ねて」に出演	1998年3月4日
NHK関東甲信越	「ふるさと素敵旅」に出演	2000年5月1日
TBS	「ドキュメント・多摩川源流」に出演	2000年6月5日
フジテレビ	「晴れたらいいね」に出演	2000年8月26日
NHK甲府	「多摩川源流の秋」に出演	2002年11月7日
NHK甲府	「秘境・妙見五段の滝」に出演	2010年7月25日
テレビ朝日	「発見　人間力」に出演	2010年10月2日
BSジャパン	「多摩川」に出演	2013年5月13日
「多摩川源流体験ツアー」塩山市中央公民館と共催		1995年から9回実施
「多摩川源流写真展」川崎・世田谷区・日野・塩山などで12回開催		

●主な紀行文・著書

「多摩川源流を行く」10回連載	1995年	朝日新聞
「多摩川源流絵図」塩山・丹波版	1999年	多摩川源流観察会
「多摩川源流絵図」小菅版	2002年5月	多摩川源流研究所
「多摩川源流絵図」奥多摩版	2004年9月	多摩川源流研究所
「紀ノ川吉野川源流絵図」	2006年3月	NPO法人全国源流ネットワーク
「熊野川源流絵図」（天之川版）	2009年9月	NPO法人全国源流ネットワーク
「道志川源流絵図」	2010年10月	NPO法人全国源流ネットワーク
「久慈川源流絵図」	2015年8月	NPO法人全国源流ネットワーク

●受　賞

第三回全国「いい川・いい川づくり」ワークショップ　準グランプリ	2000年
総務大臣表彰	2006年11月
厚生労働大臣表彰	2012年6月
環境大臣表彰	2013年4月
国土交通大臣表彰	2015年8月

水を生み出す源流は流域の宝

山梨県 小菅村長 **舩木 直美**

多摩川源流研究所の活動拠点の山梨県小菅村は、多摩川の源流部に位置していることから、社会的・経済的・文化的に東京都など首都圏との結びつきが強いのが特徴です。また、村内には明治34年に経営が始まった東京都水道水源かん養林が存在し、清浄な流れと豊かな水を流域へ届け、流域住民の生活や暮らしを支えています。

小菅村では平成12年度に第3次総合計画を策定する際、村の将来像を検討し多摩川源流という地理的条件を踏まえ、「源流にこだわり、源流での生活を謳歌できる村」を目標としました。その総合計画を具体化するために、「源流にこだわり源流を活かした」村づくりのシンボルプロジェクトとして、村づくりのシンクタンクとなる多摩川源流研究所の設立に取り組み、多摩川源流観察会の中村文明会長の協力を得て平成13年4月に設立しました。

多摩川源流研究所は設立以来、(1)源流資源の調査・研究とそのデータの蓄積、(2)会報「源流の四季」の発行など情報の発信、(3)交流人口の拡大をめざした上下流交流・連携の推進、(4)森林再生プロジェクト、(5)源流ネットワークの形成の5つを柱とする活動を展開してきました。この冊子では、これまでの多摩川源流研究所の足跡をまとめ、村づくりの記録とすることを目的としております。

現在、全国的に源流域は急激な過疎と少子高齢化の荒波にさらされ、このまま推移すれば源流域の自治体の存立が脅かされてしまいます。川の源である源流域が守られてこそ流域全体の自然や川は守られます。多摩川源流研究所の活動は、源流域と多摩川流域の人をつなげ、源流の現実とその役割を広範な流域の市民に周知することで、源流域の再生への道を切り開きました。

具体的には、源流域に残る伝統的な知恵を大学教育と結びつける「源流人

学構想」を推進し、平成19年5月には、東京農業大学と連携し、小菅村を実習のキャンパスとして村の知恵を学ぶ「多摩川源流大学」が開校しました。また、平成20年からは、2ヶ年に渡って取り組んだ源流元気再生事業を通して、村づくりの担い手のひとつであるNPO法人多摩源流こすげの誕生に貢献しました。

源流域同士の連携に目を向けると、全国の河川の最上流に位置する自治体が結集し組織された全国源流の郷協議会の設立に中心的な役割を果たしました。

次世代を担う子どもたちには、平成13年から「多摩川源流体験教室」を開始し、源流のありのままの自然に触れられる機会として、参加した親子に新鮮な感動と源流の大切さを伝えました。この源流の自然を活かした取り組みは、源流を知り、流域の皆さんと一緒になって森を守る、川を守るものとして、NPO法人多摩源流こすげに引き継がれています。

多摩川源流研究所がこのようなさまざまな活動に取り組んだことを基礎として、現在の小菅村が流域などの多様な団体と協力し、村づくりを進めています。

私たちは、今後とも源流域の保全活動を継続し、源流域が流域のかけがえのない宝物となるよう一層磨きをかけていきたいと考えております。小菅村はこれからも源流と流域との交流を大切にし、源流の郷の賑わいを取り戻していきます。

多摩川源流研究所の取り組みが全国の源流のために、更には未来を担う子どもたちのために役に立てられるように頑ってやみません。

道の駅こすげ

多摩源流小菅の湯

多摩川源流の思い出

多摩川源流観察会 副会長
伝匠舎 株式会社 石川工務所代表取締役社長
石川 重人

修業期間を終えて山梨に帰ってきたのは昭和59年（1984年）の春、私が28歳の時でした。都会と違って山梨はちょうど桜や桃の花盛りで、空気はきれいで、水は澄んでいました。中村文明氏に会ったのはそれから間もないころで、山梨の自然を愛する氏の心情に私も共感を覚え、気が付くといつしか友人になっていました。

山梨の建設業界に身を置いた私は、強烈に感じたストレスから度々仕事に行き詰まりを感じていました。そんな時に私を元気づけてくれたのは、山梨の美しい自然や文化を愛でる活動、例えば山梨の消えゆく古民家を再生したりする活動や、多摩川源流域での野外活動でありました。

体調を崩し、奥様の実家がある山梨に移り住んだ中村さんが、多摩川源流域の生命力あふれる大自然に取付かれてしまったのは無理からぬことでしょう。私の記録では、平成6年（1994年）の2月ごろ初めて中村さんからお誘いがありました。様々な源流での活動で特に思い出深いのは、腰上まである胴長を着ての谷巡りです。竜喰谷といった秘境の谷を、水に浸かりながら仲間と共に遡行する心地よさは言葉では表しきれません。また都会から訪れた方々を水十に近い山小屋で、山菜の天ぷらなどを揚げておもてなしした時の充足感も忘れることができません。さらに私に課せられた重責が源流絵図の作成でした。中村さんが長い時間をかけて調べ上げた源流域に関する貴重な記録、これを絵図にして残す仕事、そのための下絵を描くのが私の任務になりました。最初に描いたのが一ノ瀬・丹波山、次に小菅村、次に奥多摩町と描き進み、ついに奈良県川上村。今は昔、私の掛け替えのない思い出です。

源流研究所で学ばせてもらったもの

多摩川源流大学
NPO法人多摩源流こすげ 石坂 真悟

私が小菅村に移住するきっかけになったのも、多摩川源流研究所があったからこそと言っても過言ではありません。当時人口1000人弱の村で全国規模のネットワークを築き、源流域の調査・地域づくりに住民・行政・大学が連携して取り組んでいることは先駆的であり山間過疎地の文化や地域づくりに興味を持っていた私としては、とても魅力的に感じました。そして、「自分も地域づくりの流れや動きを実感したいと」一念発起し、飛び込むように埼玉から移住したのを思い出します。

当時の私は「多摩川源流大学プロジェクト」の現地責任者として、地域住民と学生を繋げたり、大学の実習を運営したりと村内の作業が主でした。しかし、源流サミット（当時、源流シンポジウム）の際には、中村所長と共に源流の達人や古老の方々を訪ね歩き、地域の成り立ちや生い立ちを学んだり、実際に源流点を目指して登山したり、源流の地域だからこそ残っている文化や資源について、見聞を拡げることができました。これは、「地に足を付けて活動する」源流大学の事業や考え方にも大きな資産となりました。

また、研究所が市民活動が盛んな多摩川を、下流から源流まで繋ぐ役目をはたしていたことで、「流域」という広い視点を実感を伴って持つことができました。小菅村のような過疎地域の未来は「住民」だけで創るのではなく、「流域住民」も含めて協働で築いていくことを実践しているのは、まさに研究所があったから成しえるものだと思います。特に、季刊誌「源流の四季」を流域自治体へ配り歩いたときには、本当に多くの応援する声を頂き皆さんに支えられていると実感できました。

今後なお一層のご発展ご躍進を遂げられることを、ご祈念申し上げます。

源流に文明あり

源流地域のパイオニアとして いつまでも輝き続けて下さい。

奈良県吉野郡天川村　森林政策課 **豕瀬　充**

年の瀬の押迫った2005年12月23日だったと思います。当時、私がいた村の入口にある天川村総合案内所に文明さんがやって来ました。ファーストコンタクトでした。

過疎化、高齢化が進んでいる中で、源流の名称や伝承が急速に忘れられている事。今、記憶に留めおかなければ地域の文化も含めて歴史の彼方に消えてしまう瀬戸際にあり、何とか記録に残せないかと全国の源流を訪ね歩いており、また、上下流連携を仕掛け源流再生に取組んでいるとの事でした。第一印象としては、心易い物腰であり、地域振興に加え人為の自然環境の保全が課題となっている本村にとって、共感する事柄が多く、同じ方向を目指して取り組んで行こうと、全国源流の郷協議会への加盟の運びとなりました。

数多い文明さんとの思い出で忘れられないのが、2009年に天川村で開催した第10回全国源流シンポジウムに際して作成した熊野川源流絵図天之川版の現地踏査で、その延長で最長となる天之川上流の神華子谷から世界遺産「大峯奥駈道」竜ヶ岳方面への遡行でした。

2008年9月17日、早朝6時より道なき道を歩き、幾多の滝を高巻する超難コースで、足場のない斜面のトラバースなど、通常の遡行と考えていた我々には非常に厳しいコースで文明さんと二人でへこたれながら歩きました。結局、谷筋を登り詰めて稜線の大峯奥駈道に到着したのが日もとっぷりと暮れた午後6時半。そこから宿泊地である人為山頂の能泉寺の宿坊までが約1時間30分。心配した宿坊の方が、サーチライトでこちらの尾根を照らして向けて励ましてくれました。我々の踏査は予定を大幅にオーバーしてしまい、神華子谷敗退として記憶しています。出来上がった源流絵図の神華子谷上流部は特に細かく記載されております。いつかはリベンジとお互い言ってましたが、あれから10年が過ぎて難しい状況となりました。しかし文明さんが提唱する源流再生は世代を超えて、それぞれの地域が実践していかなければならない課題であると思います。

多摩川源流研究所にあっては設立15年を迎え、地方創生等地域の積極的な活動取組が期待される中で、地域課題の共有、そしてその克服に向けて全国源流地域の牽引役としてのご活躍を御祈念申し上げます。

多摩川源流研究所 15年に寄せて

独立行政法人 水資源機構 理事長 金尾 健司

多摩川源流研究所15周年おめでとうございます。

私は国土交通省勤務時代に河川環境行政に携わったことがあり、その時に中村文明さんとの接点が生まれました。

私と中村さんとの出会いは、2003年9月に島根県の高津川源流で開催された、第4回源流シンポジウムです。シンポジウムの聴衆を前にして、時間を忘れて源流への思いを熱く語る姿を拝見し、圧倒された記憶があります。シンポジウムに合わせて、子どもたちの高津川源流の体験活動が行われました。私たちも一緒になって、大きな淵に飛び込み、瀬で流される体験をしました。このシンポジウムでの出来事は、今でも目に焼き付いています。その後、源流シンポジウムや源流サミットに何度か出席する機会を得て、交流を深めてきました。

帝喰谷に始まり、源流に残る地名の由来、熊に出会ったことなど、多くの興味深い話を聞かせてもらいました。そのことが形となって、源流絵図という貴重な資料になっています。

源流研究所長としての中村さんは、源流再生を国民運動とすべく、全国の源流自治体の集まりである「源流の郷協議会」の設立、私も多少関与した「源流白書」の作成、基本法制定への働きかけといった、幅広い活動に尽力され、その功績は偉大であります。

私も水源地域の振興に関わる者として、源流地域の危機を看過してはならないとの認識のもと、これまでに中村さんが培われてきた研究所の成果が社会に還元されることを願って止みません。

文明さんの「森林の危機は、水の危機だー」今も継続中

株式会社 源 常務 黒川 文一

2005年、多摩川源流所では「緑のボランティア活動」は、26回の各種森林整備の活動に取り組んだ。

2011年には更に技術を磨きたいという要望に、文明さんが奮闘し助成金を獲得し、一泊2日計6回の「多摩川源流インストラクター養成講習」を実施し14名が参加しました。夜の懇親会で毎回、ほろ酔いになった文明さんが、お叫びする「森林の危機は水の危機だー、多摩川の源流を守れーー」今でも思い出す度、笑ってしまいます。

養成講習では、東京農業大学の宮林先生の森林機能講習会や、森林整備のためにチェンソー、刈払い機の安全講習会も全員が取得した。

養成講習会が終わると同時に、参加者の有志10名により、「こすげ木こり倶楽部」が結成された。これには文明さんも私も大感動したことを覚えています。

早速に拠点（倶楽部ハウス）確保のために、空き家となっていた農家の借家交渉を行ったり、全員のマイチェンソーを揃えるために、助成金の獲得をしました。文明さんの分を含め新品のチェンソー11台が届き、ずらりと並べたチェンソーの後ろで皆で手を握り、記念撮影した日を、今でも忘れません。

倶楽部の活動には、地元の者がかかわらないと山の所有者等との交渉が難しいこともあり、当初から私が事務局を引き受け、既に結成から8年が過ぎました。

現在も毎月第2、第4の土日にメンバーが集合し、ボランティアで、源流の美林づくり（枝打ち・間伐）を行いながら、道の駅レストランのピザ用薪を格安で納品するための、薪割りをしたり、毎回、気持ちの良い汗を流しています。
文明さんのお叫び「森林の危機は水の危機だー、多摩川の源流を守れーー」は、地味な活動ですが、今もしっかり継続していますよ…

多摩川源流研究所 15周年に寄せて

奈良県 川上村 坂口 泰一

「多摩川源流研究所」15周年おめでとうございます。中村文明氏と出会ったのは、平成13年頃のことでしょうか。全国の熱心な川の運動をしている場に参加を始めたとき「すごい奴がいるな。」が第一印象でした。

そして、「多摩川源流研究所」を立ち上げるということで、小菅村に招待していただいたと思います。私も、「森と水の源流館」の建設に向けて動いている頃でした。「先を越された。」というのが自分の思いでした。

川上村は、平成14年に「森と水の源流館」をオープンし、約9億円の基金を持って活動を始めました。川の運動は、全国で早くから活動が生まれていましたが、そのほとんどは、中、下流の地域です。「源流」ということを前面に出した運動は初めてだったのではないでしょうか。その活動の中で「源流学」(源流に学べ)という言葉を使ったのは、川上村が最初であることを、結いっぱい叫んだものでした。「東の多摩川、西の吉野川(紀の川)」と呼んで、中村氏と源流地域の活動の先駆者として、源流に光を当てるための活動を進めてきました。現在「源流」という言葉を日本の法律の中に入れたいと全国の源流の仲間たちと取組み、目前まで来ています。

平成8年に「川1宣言」を全国に向けて発信し、最上流から森、川を守る運動を始めてきた思いと、源流部に足を踏み入れ、その魅力に取りつかれた人間の思いが合致し、ここまで進めて来られたのだと、思い返しています。

多摩川源流研究所との出会いと源流とのかかわり

国土交通省関東地方整備局河川部長 佐藤 寿延

最初に中村文明さんとお会いしたのは、2001年か2002年の頃だったと記憶している。当時、国交省河川局河川環境課で課長補佐をしており、自然再生推進法の策定に深くかかわった縁から、セミナーでの講演依頼に本省に来られた時だと記憶している。

河川にかかる市民団体の窓口ゆえに、土日には全国を飛び回っており、最初はその一つ程度の認識であったが、徐々に源流の深みにはまっていった。文明さんに加え源流に魅了されたと感じている。

その後、環境省に異動となり、その1年半の在任中に、多摩川源流自然再生協議会の創設、国土創発調査と源流研究所の拡大期？に深く関わり合いをもつことができた。小菅村の5回以上に加え、島根県、宮崎県等の源流を訪問できたことはよい経験になっている。

数年後、鬼怒川源流部の湯西川ダムの建設を担当することとなった。ダム事業は、ダム建設と生活再建（地域活性化）が車の両輪であり、今度は自らが湯西川という源流の活性化に取り組む立場となった。生業としての林業の再生は難しく、温泉を中心とした観光業をどのように活性化させていくのかが課題であった。湯西川源流部には、トチノキの原生林が残っており、水陸両用バスの導入とともに、この原生林の魅力を活かすことを考えた。文明さんにも本当にご協力いただきながら取り組んだことも今ではよい思い出になっている。

小菅村へは10年ほど前に湯西川の地元の方々と一緒に訪れたのが最後となっている。

源流はそれぞれ魅力に溢れている。小菅村での私のお気に入りの場所は北側斜面のこんにゃく畑である。今、どうなっているのか？また訪れ、この目で見たいと思う。

多摩川源流に光をあてた15年

初代事務局長 佐藤 英敏

多摩川源流研究所は、平成13年4月8日に設立されました。その設立の経過について触れてみます。

小菅村は、昭和62年の第1回「多摩源流まつり」の開催を期に『多摩川源流』をキーワードに据えた村づくりを推進していました。しかしその取り組みは、イベント交流などを中とした一過性のもので、もっと多摩川源流を前面に出した力強い取り組みが求められていました。そのような状況の中で、小菅村は、平成12年度を初年度とする第3次小菅村総合計画のシンボルプロジェクトに源流の知恵を集め、源流からの情報発信を目的とした『多摩川源流地域総合研究所』を開設することを計画に盛り込み、その具現化を模索していました。平成12年6月のある日、多摩川の源流を踏破して源流絵図を作成した中村文明氏が源流の達人として新聞記事に掲載されました。早速、連絡を取り合い、文明氏から多摩川源流への熱い思いや源流の魅力や価値についてお話をお聞きすることができ、私たちはその熱い語りに圧倒されました。そして村の第3次総合計画の概要を説明すると文明氏の目が『多摩川源流地域総合研究所』にくぎ付けになりました。村は、文明氏の力を借りて研究所を設立することを決定し、平成12年9月27日に研究所設立プロジェクトを立ち上げ、多摩川に造詣のある村内外の方々と研究所の役割や活動内容など基本方針について協議を重ねました。

その結果、4月8日(日)に『多摩川源流研究所』の設立総会と第1回多摩川源流シンポジウムを開催するに至りました。当日は流域から大勢の方々が小菅村中央公民館に駆けつけてくださり、その期待の重さに身が震えたことを覚えています。最初の出会いから約5年間、研究所の事務局長として文明所長と歩ませていただき、その活動は現在も継承され様々な施策へと発展しています。中村文明所長の信念を貫くパワーや人を引き付ける話術、人柄を間近に感じながら一緒に仕事ができましたことは、私にとって大きな財産になったように思います。

15年間を顧みて

東京農業大学地域環境科学部
奥多摩演習林 教授 **菅原　泉**
(2019.12.8 ご逝去)

多摩川源流研究所の使命は多々ありますが、中村所長は温故知新を心に秘め、源流域で暮らしてきた古の知恵を育んだ背景を発掘してきた人物とも云えます。特に人々の暮らしと共にあった地名の再認識に努め、自らの両脚を資本に古老から聞き取った道なき道の探索と深い思考によって絵図面を完成させたことは後世への宝物です。

研究所は源流を育む森林に注目し、一緒にいくつかの調査も行いました。百年の森構想の基本となる人工造林地の健全度調査、そして山へのアクセスを容易にする作業道の開設事業計画などがありました。さらには市民を小菅の森林にいざなう様々なボランティア活動も忘れてはなりません。小菅村内で繰り広げられる市民による森林保全活動では参加者自ら汗を流し、毎回満足して帰路に着いたことは高く評価されます。参加者は中村所長の熱意を一泊二日でしっかり受け止め、とりわけ、夕食を交えた夜間講話の「中村節」にはいつの間にか吸い込まれていました。しかも、参加者が地元に帰り体験したことを「小菅村のスピーカー」となって伝え広めていることは素晴らしいことです。

水源地は小菅村だけではありません。全国源流サミットの開催、全国源流の郷協議会の設立にも深く関わり、全国の水源地との連携を呼びかけ、年々絆を強めたことも研究所の象徴的な出来事でした。また、林業先進地視察もありました。奈良県川上村三之公川トガサワラ原始林(日本固有種の貴重な群生地)から連続した狭い尾根を登り、途中にてかくし平(南朝尊義王行宮跡地)を見下ろし、追っ手から逃れる王子達の心境が伝わりました。さらに奥へ進み、記憶が正しければ、三重県境の衰弱した大木のモミの付近で中村所長はクロスズメバチ(地バチ)に襲われて一撃を食らったはずです。いつも笑顔が絶えない所長ですがそのときの表情は今でも忘れられません。

過ぎ去りし時間の中には様々な出来事がありました。これからの未来に向け大きな扉が開けることを祈ります。

15周年
おめでとうございます

とどろき水辺の楽校 鈴木 眞智子

初めて小菅村に子ども達を連れて行った時小菅村の人口は1080人と当時の総務課長佐藤さんが説明してくれました。川崎市が120万人の頃でした。まだ木の香も新しい源流研究所の集会室で、多摩川源流の村をアピールする中村文明所長や女性職員の井村さんの熱意に圧倒されたのを覚えています。

そして何よりも源流体験の清冽な水の音、森閑とした道々の植物などそれはそれは声も出ないほどの素晴らしさでした。

それから毎年夏休みには「源流体験」と銘打って訪れました。ある年などは人口が800人に減少していたのに140人もの参加者がありました。参加者の人数に応じてキャンプ場はすべてお世話になりました。

そのうち、流域の水辺の楽校に声を掛けたり中原区の中学校2校も多摩川学習の体験として小菅村に行くようになりました。また、大人向けや幼児がいる若いママさんたちにも声を掛けてツアーを組みすべての旅館や民宿にも伺い美味しい山間の村ならではのご馳走も頂きました。そればかりではなく、川崎でも小菅村の物産を紹介しました。中原区民祭りや川崎フロンターレのイベントでヤマメの塩焼きやマコモダケの販売のお手伝いをしたり、とどろき水辺の楽校では小菅村や源流域が今も大切な存在になっています。近年、参加する世代が代わり、我々の源流への思いとは違う目的での参加者が増え、様々な障害が多くなり毎年あちこちの助成金を獲得してまで参加者の負担を少なくしたいと思って実施してきたことが理解してもらえなくなってきたことで、我々の源流への役割は終えたのではないかと皆で話し合い中学校1校を残して今は実施していませんが、これからも多摩川源流小菅村と多くの皆さんから頂いた好意への感謝は大切にして、下流域での多摩川での活動を続けていきたいと思っています。小菅村、源流研究所の皆様ありがとうございました。

源流の一滴から生まれた絆

「多摩川と語る会」会長 田中 喜美子

私と源流との出会いは貴研究所設立の5年程前に遡ります。

水干の岩間から滴る源流の一滴を口にしたとき、体の中を多摩川が流れるのを覚えた。この衝撃的な出会いから多摩川138キロを歩こうと「多摩川と語る会」が生まれた河口0点から会員29名と共に出発した。一方源流の里を知ろうと源流フェスティバルに駆けつけた。会場は神金小学校一ノ瀬分校、来年は廃校になる校庭にたった一人の在校生。その小学3年の女の子が、無心に掲げるお祭の村旗が夏空高く昇ってゆく。その姿に私の心に込み上げてくるものがあった。

翌年の川崎市制70周年の市民企画に「川と語り川に学ぶ」というテーマで多摩川を取り上げ、昨年のフェスティバル会場に写真展を開いた。中村文明氏に「源流の講演と写真展」を依頼した。文明氏の源流への熱い思いと素晴らしい写真展、その上源流の里からは天然水のボトルが届き、会場は源流へのエールに湧いた。

その翌年には川崎市のエコミュージアムの拠点として宿河原堰管理棟の一室に二ヶ領せせらぎ館が開館した。そのオープニング企画として文明氏による源流の四季をとらえた写真のパネル展を行ない、館のテープカットには源流から駆けつけて頂いた。開館から三ヶ月7千余の来館者があり源流ファンが生まれた。

一方「語る会」は4年半をかけて源流に到達。その日は「源流観察会」の方による祝賀会。おいしそうな山菜鍋がストーブの上に湯気を上げ、小屋は祝杯の声にはちきれそうだった。その時突然豪雨がトタン屋根を烈しく打った。その雨音が私には天から届いた拍手に思えた。この感動から20世紀も終わろうとしている今、一本の川で結ばれた源流と河口の絆を残したいと冊子「多摩川と語る」を出版した。

時の建設省京浜工事事務所長米原秀人氏と中村文明氏に巻頭文を頂いたこの本は国会図書館にも納本しました。世紀を越えて保存されることでしょう。

源流研究所のますますの発展を祈念します。

中村文明さんとの思いで

旧東津野村役場職員
四万十川リバーマスター
よみがえれ四万十源流の会会員 豊田 庄二

四万十川のことならこの人に聞いたらいい。との情報だけで、出会ったあの日から全国源流大会への参加が始まりました。

東津野村役場で初めて出会い、時間を忘れて川の話で盛り上がったあの時間は忘れようもありません。今でも鮮明に覚えています。その人は中村文明さんあなたです。人生で最高の出会いでした。

ちょうど私の育った環境や経験と、文明さんの活動が完全にダブっていたからでした。源流の地図や魚の話で話し込み、気が付けば2時間を過ぎていたのです。文明さんの熱い思いが伝わってきて、やがて全国源流シンポジウムへの参加が始まりました。

盛岡市での大会では、文明さんから、四万十川から参加してくれましたという紹介を受けて立ち上がると、会場全体から歓迎の大きな拍手をいただいた時は鳥肌が立ったのを覚えています。

その後、行政への参加促進を進言し、やっと会に参加することとなり、やがて四万十川源流の津野町での源流サミットの開催が実現した時は長かった時間が報われた思いでした。

水自然に恵まれた源流域が流域全体を巻き込んで、日本全体が元気で活性化するよう連携して活動できるのは多摩川源流研究所が先頭に立って推進してきたからだと痛感しています。

貴研究所の皆様と中村文明さんそして、今まで出会った方々に深謝するとともに、さらなる発展と、関係各位の皆様の御隆盛を心より御祈念申し上げ、15周年のお喜びとお礼にさせていただきます。

15周年本当におめでとうございます。そして、ありがとうございました。

文明を育み、源流文化の男 中村文明学兄

東京農業大学教授
森林づくりコミッション全国協議会運営委員長
美しい森林づくり全国推進協議会事務局長
博士（農学） 宮林 茂幸

世界四大文明といえば、メソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明と黄河文明である。いうまでもなく、世界における人類史の発展の礎を物語る重要な遺産である。暮らしのために、火を使い、木を奏で、水を育み、そして石を磨き、土地を耕し、文字に学ぶことを発明し、大きく発展していた。

ところが、いずれの文明も滅んでいる。異民族の侵入、内乱や革命、自然災害、気候変動など色々な説があるが、基本的には牛産の拡大や増産、あるいは時の権力者による浪費などによって滅んでしまった。その要因の多くは、人間の工夫によって自然循環を無視した牛産や開発によって、地力の衰え、水環境の悪化、広大な森林の消失などの環境の悪化が要因と考えられている。

かつて、わが国の源流域は、地形が急峻で、気象も厳しい条件にあることから、その自然環境に適応した暮らしの「技」や「知恵」を持ち、300年近くの源流文化を培い、優れた文化を形成してきた。その源流が世界四大文明、戦後の不均衡発展の中で、少子高齢化や第二の過疎化等によって滅亡の危機に瀕している。今や源流文明は滅ぶ。

このような中で、「源流は日本の宝」「源流を失うは日本の損失」「源流が滅ぶは日本の危機」として、立ち上がったのが中村文明氏である。小菅村の多摩川源流研究所長を肩書に。子ども達の源流体験を指導する傍ら、全国の源流を訪れ、源流に訪れた足跡は1000回余りにも及ぶ。源流の長老や老婆からの悉皆調査によって手がけたのが「全国源流絵図」である。

環境の時代、循環型社会などからグリーン・インフラやグリーン・エコノミなど新たな経済社会が示される現代にあって、源流にこそそのヒントがある。源流に学び、源流に育むことを強調し、源流を守る第一の人として日夜精進している。まさに、源流文明を源流文化として甦らせた者。彼こそが平成の源流研究家と呼ぶに相応しい逸材といえる。

益々のご活躍を祈念申し上げる次第である。

非効率こそ「想いが伝わる」

初代 NPO法人多摩源流こすげ事務局長
望月 徹男

私が源流研究所のお仕事をさせていただいたのは、平成21・22年度実施した「地方の元気再生事業」に関わったと同時に、「源流大学」「源流研究所」「NPO法人多摩源流こすげ」の3つの組織が上下流交流の拠点として白沢分校に場所を構えた時になります。

それぞれの組織が同じ目的をもち、相互が交わりながらの活動が進みだした時に、中村所長より、「源流の四季」を下流域の市町村に届ける仕事のお誘いをいただきました。

「源流の四季」をどのようにして下流域に届けるか。当初は小菅村から郵送で送っていたそうですが、なかなか想いまで届けることができず、「そうであれば自ら届けよう」と直接手渡しをするようになったそうです。

私はこの「想いを届ける配達」を初めてご一緒したときに、「非効率」以上に「伝わる」ことの大切さを実感したような気がします。

多摩川に関わりのある約30近い市町村へ2日間かけてお邪魔しました。遠くは東京大田区や神奈川川崎市等、多摩川138kmまさに源流部からの河口へ、想い伝える使者としての役目は重大でした。

スタートは立川市役所。300部ほどの源流の四季を手にもち中村所長の後ろを歩いていきます。源流の四季は文字通り春夏秋冬ごとに発行していたので、「今回もありがとうございます！3か月はあっという間ですね。毎回楽しみにしていますよ」とそこには温かく出迎えてくれる職員の皆様が待っていました。

時間的には僅かですが、そのやり取りで、「多摩川源流部からの想い」を伝える人、伝わる人の「繋がり」を強く感じました。

この「源流の四季」という冊子によって中村所長をはじめ、関わった多くの筆者の想いが、「顔が見える」ことにより価値を更に高め、多くの下流域のみなさまに届けていたように思います。何を一番大事にするか、時には時間やお金よりも大事なことがあるのだと気づかせてくれた仕事でした。

時間と言えば、毎回2日間の中村所長と2人きりの車中での時間は「夢を形にすること」を考えるとても有意義な時間でした。私はこの時間があったから今もなお新しい形を作る仕事が好きなのかもしれません。

あっという間に月日が流れていきますが、今この文書を私の目指す「夢を形にする」新しい職場で作成しているのも何かの縁のように感じます。

『最初の一滴』を永遠に

元東京電力・環境部
（環境省　環境再生・資源循環局）矢野 康明

『多摩川の最初の一滴だから玉のように輝く水滴でなければならんと、4時間待ち続けてやっと撮れたんです。』中村文明所長の名台詞。

平成17年7月7日第4回多摩川源流自然再生協議会において、東京電力が自然再生協議会に参加することが承認され、地球温暖化対策の取組みの一環として多摩川源流の森林再生事業に参加させていただきました。

江戸・玉川上水の水源となる源流・上流の森が「お止め山」として伐採が制限されていた頃から明治以降の森の変遷を中村文明所長から教わるとともに、源流域ならではの豊かな自然と手が入らない暗い人工林のギャップを案内いただきました。それから2年半にわたり東京農業大学の先生方や村の方々とともに「森に光を入れる」ことを目標に取り組ませていただきました。

崩れない作業道づくりで新たな森林経営を開拓された大橋慶三郎さんと古野杉の大御所岡橋清元さんらに何度も出向いていただき道づくりの真髄を教わり、急峻な源流の森に道を拓く試験事業を森林組合に取り組んでいただきました。「尾根の道で源流の森を強くする」と中村文明所長の目が輝いていたことが今でも忘れられません。

「松鶴のブナ」を源流の森のシンボルとして継承するため、根元を守る歩道を整備するなど数々の試験事業を経て、平成20年3月多摩川源流自然再生協議会から、「全体構想・実施計画」に「源流百年の森づくり」の活動指針を盛り込んで小菅村の村長に報告いただきました。

源流の森と文化の再興に向けて、流域の方々とともにその価値を見出すことに情熱を傾けてこられた小菅村・源流研究所の15年の活動が、「最初の一滴」を永遠につなぐ原動力としてさらに発展されることを祈念申し上げます。

Kosuge Village, Yamanashi Prefecture

多摩川源流研究所
15年間の
歩み

2001－2016

多摩川源流研究所について

多摩川源流研究所 設立の目的

1901年(明治34年)、東京都(当時は東京府)は都民の水瓶である多摩川の源流域である東京都奥多摩町、山梨県小菅村・丹波山村・甲州市の4つの地域を水道水源林として管理を開始しました。その後110年以上もの間、土砂崩れや災害を予防し、豊富で清らかな水を守るため大切に維持・管理してきました。首都圏のすぐ近くであるにもかかわらず企業などの開発から逃れ、手付かずの豊かな自然が広範囲に渡って残されている、大変希少な地域なのです。

コラム 東京都水道水源林の歴史

東京都水道局は1901年(明治34年)から110年以上にわたり多摩川上流域の森林を水道水源林として管理しています。

年次	西暦	内容	所有者	備考
江戸時代	～1867	多摩川上流域一帯の森林は、おおむね徳川幕府の領地に属し、地域住民は入会権（注1）を持ち、生活に必要な林産物の収穫が許されていた。 また、幕府直轄の「お留（止）め山」（主に御巣鷹山）も各所にあり、おおむね良好な森林を形成していた。	徳川幕府	承応3年（1654）玉川上水完成
明治元年～30年	1868～1897	多摩川上流域の山林は「山林原野官民有区分」により官林に編入され、その後御料林（注2）に編入されたことで、薪炭の入会が制約を受けることになり、最上流部等では、森林の荒廃が進行した。	農商務省山林局等	明治11年(1878)東京府吏員山城祐之が多摩川源流（水干）を確認
明治34年	1901	東京府は水源地の荒廃を憂いて、山梨県下の丹波山村、小菅村の約8,140ha及び府下の日原川上流約320haの御料林を譲り受け、府自ら経営を開始した。 また、同時に日原川流域の公・私有林約5,100haを保安林に編入した。	東京府	明治26年(1893)神奈川県から一多摩地域が東京府に編入 明治30年(1897)森林法発布
明治41年～42年	1908～1909	水源林の荒廃は、市民への給水の責務を有する市自ら解決すべきであるとして、尾崎行雄東京市長は調査を行い、水源地経営案を作成した。		
明治43年	1910	上記の経営案が市議会で議決され、10月に水源林事務所を開設した。 また、府下の御料林約700haを譲り受け、積極的に水源かん養林の経営に着手した。	東京市	

多摩川源流研究所は、この源流域の多種多様な動植物に溢れる貴重な森林はもちろん、地域に残る歴史的・文化的・経済的にも豊かな資源に着目。多摩川源流域全体を調査研究の対象として分野毎に調査・研究し、源流域の自然環境保全とともに人と自然が調和した源流の里づくりを目的とします。またその成果を多摩川源流域に暮らす人たち、さらには全国各地の源流域へ発信することで相互の交流を深め日本全国の森と川、そして命の源である水を守ることへと繋げていきたいと考えています。

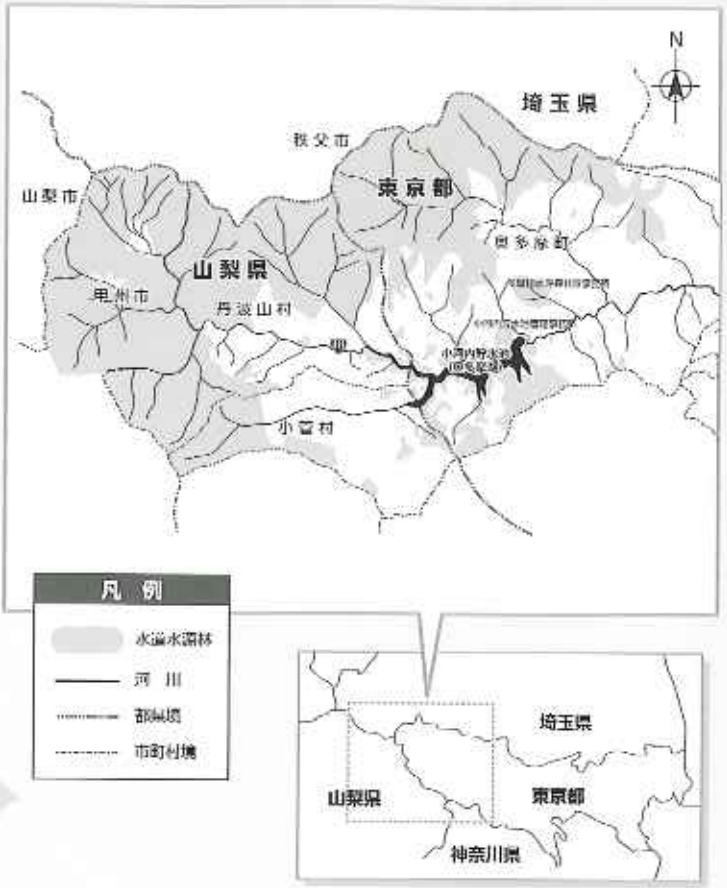
明治45年	1912	山梨県秋原山（現甲州市）の御料林（注3）約5,610haと、既に府有林であった約8,460haを東京市が譲り受けた。	東京市 昭和18年（1943）東京都	昭和32年（1957）国立公園法は廃止となり、自然公園法が成立 昭和37年（1957）小河内ダム完成
大正2年～15年	1913～1926	山梨県及び府下の私有林約610haを買収し、明治44年から開始した府下の公・私有林との部分林（注4）約870haを合わせ、経営面積は約16,250haとなった。		
昭和8年	1933	日原川上流の私有林約4,780haを買収した。		
昭和25年	1950	旧古里村（現奥多摩町）の部分林約90haに同村有林約100haを加え、約190haを買収した。		
昭和42年	1967	小河内ダム建設当時に買収したダム周囲林約560haが小河内貯水池管理事務所から移管され、水源林はほぼ現在の形になった。さらに数件の売却や交換等を経て、経営面積は約21,634haになった。		
平成2年	1990	多摩川流域の水源施設の管理一元化を図るため、水源林事務所を水源管理事務所に改称し、村山・山口貯水池及び小河内貯水池とともに、水源林を水源施設の一つとして管理することになった。		
平成13年	2001	水道水源林の管理開始から100周年を迎えた。		
平成14年	2002	多摩川水源森林隊を設立した。		
平成25年～31年	2012～2019	民有林購入事業により、管理面積は約24,000ha（平成31年4月現在）になった。		

(注1)入会権…農民が燃料等の生活資材を共同で採取できる権利
(注2)御料林…室で管理していた森林
(注3)帝室林…皇室により帝に下賜された森林
(注4)部分林(分収契約林)…私有地又は町村有地に地上権を設定し、水道局で管理していた森林

こんなに広い東京都の水道水源林

現在、東京都水道局が管理する水道水源林は、東京都奥多摩町、山梨県の小菅村・丹波山村・甲州市にまたがり、その範囲は東西約30.9km、南北約19.5km、面積は約23,000haです。

これは多摩川上流域に広がる森林面積の約50%となり、日本国内の水道事業体が管理する森林としては最大規模となっています。



多摩川源流研究所の役割

川は源流から上流、中流、下流まで流域全体が運命共同体です。上流での土砂崩れ等の自然崩壊は下流での河川の氾濫へと直結します。

流域全体の中でも最初の一滴が生まれる源流は最も大切な位置にありますが、現在、全国的に見ても急激な少子高齢化から各地の源流を含む町や村は過疎化の一途を辿り、人の手が入らなくなった里山は荒れ、そこに息づいていた文化と共に存続の危機に直面しています。

多摩川源流研究所は東京都が維持管理してきた水道水源林である山梨県小菅村・丹波山村・甲州市、東京都奥多摩町を含む多摩川の源流域を調査の対象として設立されました。

この4つの市町村とともに東京都多摩地区・世田谷区・大田区、神奈川県川崎市など下流域が共に手を取り、流域全体の知恵と力と情熱を結集。研究・情報発信・体験と交流の拠点として、また全国の源流ネットワークの拠点としての役割を担っていきたいと考えます。

多摩川は全国的に見ても流域の市民から愛されながら利用されてきた歴史と確かな実績が評価されている川です。

川の流れが一筋に結ばれているように、そこに暮らす私たちも"多摩川を愛する"という一筋の固い絆で結ばれています。今こそ、この関係をより確かなものへとするための活発な交流が求められている時です。

全国各地の源流域は今、同じ悩みや不安を抱えていますが、どんな困難が待ち構えていようとも歩み出してこそ道は開けます。源流域が直面する現実を流域全体に暮らす人々へ伝えることで、その再生と復興へと繋げていきましょう。

多摩川源流研究所の事業内容

多摩川源流研究所の事業の運営にあたっては市民・企業・行政・学識経験者で構成される運営委員会が当たり、多くの方々からの意見や要望を取り入れるため研究所懇談会を設置。

多摩川源流域の恵まれた自然環境の保存活動を前提として4つの事業を軸として取り組んでいくことにしました。

第1 源流の自然・歴史・文化・経済の4つの資源の徹底的調査・研究

多摩川の源流は、水は清らかに澄み木々の豊かな緑と多種多様な動物に溢れたフィールドミュージアムです。広い視野での調査や研究を進め、様々な分野との交流から『源流学』と呼ぶに相応しい学問の構築を行います。

第2 研究所の会報誌"源流の四季"発行

多くの市民が多摩川源流域に関心を持ちファンとなってもらえるよう研究所の会報誌『源流の四季』を年4回、関係市町村の協力を得て発行していきます。多摩川源流に関する様々な情報を美しい写真と共に掲載。多摩川流域はもちろん全国の源流ファンに向けて発信していきます。

第3 源流体験教室の開催

多摩川源流の豊かな自然は直接触れてこそ、その真の素晴らしさを知ることができます。

そこには日本人にとっての原体験と原風景があり、冷たく澄んだ水に入り川を歩き、多くの生き物や植物に出会うという体験は人間生活の原点を実感できる貴重な場となることでしょう。子どもから大人まで様々な年代を対象に、自然を愛し大切にする心を育てる教室を開催します。

第4 全国の源流域との積極的な交流

社会の高度化・情報化が進めば進む程、人と人、人と自然との触れ合いがますます大切になります。

私たちは交流の基本は人と人との結びつきにあると考え、多摩川源流域での自然体験はもちろん、そこでの住民との触れ合いの機会を分野別・世代別・目的別に作り積極的に展開していきます。こうした体験に心惹かれた人々は、きっと何度となく、この地へ足を向けてくれることとなるでしょう。

Kinsya Village, Yamanashi Prefecture

多摩川源流研究所
15年間の
歩み

2001 − 2016

15年間の歩み

15年間の主な活動 （一部抜粋）

2001年度（平成13年）

● 多摩川源流研究所記念式典	4月
● 第1回全国源流シンポジウム（小菅村）	4月
● 会報「源流の四季」を発行	4月
● 源流学校指導者養成講座	4月～6月
● 源流体験教室を実施	7月
● 源流・水源の森林相調査を開始	9月
● 寛仁親王殿下が多摩川源流視察	11月
● 第2回全国源流シンポジウム（大分県大野川）	11月

2002年度（平成14年）

● 源流絵図小菅版完成	5月
● 第3回全国源流シンポジウム（奈良県川上村）	5月
● 全国源流ネットワーク結成	5月
● 源流体験教室のモデル推進	7月
● 多摩川源流協議会の結成	7月
● 水と森と食の祭典	10月

2003年度（平成15年）

● 多摩川源流プロジェクト21　源流協議会	5月
● 緑のボランティア開始	5月～12月
● 第4回全国源流シンポジウム（高津川）	10月
● 源流水干体験ツアー	10月
● 源流・干し柿体験ツアー	11月
● 第1回全国源流フォーラム（小菅村）	12月
● 多摩川源流自然再生推進協議会結成	3月

2004年度（平成16年）

● 国土施策創発調査を発表・申請	4月
● 多摩川源流ネットワーク結成	6月
● 小菅村　源流振興課　設置	7月
● 国土施策創発調査・源流再生事業開始	9月
● 第５回全国源流シンポジウム（東京農大）	10月
● 第15回多摩川流域セミナー（小菅村）	12月
●「源流絵図」奥多摩版作成	10月
● 森林再生モデル林整備事業（国土創発）	2月
● 全国源流再生シンポジウム（島根県）	3月

2005年度（平成17年）

● 国土施策創発調査・源流大学　提言	4月
● 多摩川源流大学構想検討会設置	5月
● 多摩川源流写真展（大田区）	6月
● 自然再生協議会に東京電力参加	7月
● 第６回全国源流シンポジウム（盛岡）	10月
● 全国源流の郷協議会設立	11月
● 東京電力　森林再生フォーラム開催	3月

2006年度（平成18年）

● 現代ＧＰ多摩川源流大学設立（文科省認可）	4月
● 源流塾「多摩川源流百年の森づくり」	5月
● 第７回全国源流シンポジウム（小菅村）	10月
● せせらぎ館　源流のヒノキで腰板	11月
●「源流絵図」吉野川・紀ノ川完成	3月

2007年度（平成19年）

● 小菅村の巨樹・巨木調査	4月
● 源流大学開校	5月
● 第2回黎明祭　大橋式路網の完成を祝う	10月
● 第8回全国源流シンポジウム（宮崎県五ヶ瀬町）	10月
●「松鶴のブナ」防護柵設置	11月
● 総務大臣表彰	11月
● 自然再生協議会全体構想・実施計画承認	3月

2008年度（平成20年）

●「地方の元気再生事業」申請	4月
● 降矢英昭新村長へインタビュー	6月
● 源流体験教室　22団体　1300名参加	7月～8月
● 第9回全国源流シンポジウム・木祖村大会に600名	8月
● 源流元気再生プロジェクト開始	9月
● 木づかい保健室プロジェクト第1号完成	10月
● 第三回黎明祭　「大菩薩ヒノキ」宣言	11月
● 狛江・川崎・大田区で木づかいモデル実施へ	
● 大橋式パンフ完成　DVD作製	3月

源流元気再生プロジェクト

2009年度（平成21年）

● 小菅村の巨樹・巨木調査パンフ完成	4月
● 財務省主計官視察　元気再生	5月
● 平成21年度源流元気再生運営委員会開催	6月
● 大橋式路網の科学的検証（吉野）	8月
● 轆轤先進地視察（福島県下郷町）	9月
● 全国森林作業道研究会開催	10月
● 第10回全国源流シンポジウム（天川村）	10月
● 鶴峠森林作業道第3期（1,800m）	10月
● NPO法人多摩源流こすげ設立	11月
● 国に森林作業道　政策提言	12月
● 森林作業道事例集パンフ完成	3月

2010年度（平成22年）

● シカの食害調査　大菩薩	5月
● 源流大学座学講師	6月
● 多摩川源流ゼミナール開催	7月～11月
● 源流体験教室　参加者1,700名	7月～8月
● 全国森林作業道研究会　150名参加	9月（2日間）
● こすげお散歩ゆ～の路	9月
● マコモタケの販売へ協力	10月
● 源流緑のボランティア	9月～11月
● 第1回全国源流サミット（道志村）	10月
● 道志村源流絵図完成	10月
● 源流資源調査（根羽村）	3月

2011年度(平成23年)

- 第2回全国源流サミット（新庄村） 10月
- 小菅村景観計画作成

2012年度(平成24年)

- 第3回全国源流サミット（津野町） 10月
- 高橋裕先生　源流白書の作成提案

2013年度(平成25年)

- 第4回全国源流サミット（みなかみ町） 9月
- 源流白書検討委員会設置
- 源流白書を作成

2014年度(平成26年)

- 第5回全国源流サミット（川上村） 10月
- 源流白書発表会（記者会見）
- 源流白書検証委員会

2015年度(平成27年)

- 第6回全国源流サミット（根羽村） 10月
- 源流白書検証委員会
- 源流基本法の制定へ

2016年度（平成28年）

- 第７回全国源流サミット （松野町） 10月
- 源流白書検証委員会

柳沢峠より富士山を望む

丹波渓谷

丹波渓谷

多摩川源流体験報告会（2005年3月）

東京農業大学
多摩川源流大学
設置運営委員会
（2006年10月）

大橋式路網
現地研修会
（2009年1月）

Kawaga Village, Yamanashi Prefecture

多摩川源流研究所
15年間の歩み

2001 − 2016

4つの主な事業

多摩川源流研究所が行ってきた、

❶源流絵図 P38

❷源流体験教室 P80

❸緑のボランティア・森林再生プロジェクト P99

❹「全国源流ネットワーク」づくり P120

4つの事業の15年間を紹介していきます。

源流絵図
吉野川版（奈良県）
現地調査
（2005年3月）

源流絵図
天之川版（奈良県）
現地聞き取り調査
（2006年6月）

熊野川・天之川版
（奈良県天川村）

4つの主な事業

源流絵図

源流絵図

源流絵図とは…

多摩川源流研究所では、源流域の手付かずの自然に着目し、源流域から支流、沢、尾根、滝、渕などの名称発掘と、その由来の調査研究を行い、住民に源流域への関心を深めてもらい、さらには環境保全や自然保護の機運の醸成に役立たせたいと考えました。

そして、絵図というより分かりやすい方法により後世に源流域の文化や名称などを残していくためこの事業を行ってきました。

■ 多摩川(塩山・丹波山)版 (1999年)

多摩川の源流域は首都圏の水瓶として大変重要な使命を果たしながらも、その大部分は山梨県が占めています。その雄大な山々の深くて鬱そうとした森林と険しく急な斜面の谷は人々が踏み入ることを拒んできました。

そこで、多摩川の源流域の由来の調査研究を開始。山梨県民や多摩川の中流から下流域の住民に源流の生活や文化を通じて、関心を持って頂くため、第一号となる当絵図の制作を行いました。

現在、多摩川源流域では急速な少子高齢化による過疎化が進み源流域の自然や言い伝えなどの伝承に詳しい方が激減しています。源流域に脈々と息づいてきた、そこに生きる人々の歴史や自然に対する愛着そして畏敬の念は次世代に残すべき貴重な財産です。

しゃくなげ橋から

尾崎行雄記念碑

多摩川（塩山・丹波山）版 表紙

多摩川源流絵図

源流に夢とロマンを求めて

―多摩川源流部の滝や
淵の名称とその由来―

企画・制作・写真：多摩川源流整備委員会　中村　文明
執筆協力：多摩川源流研究会　石田　重人
協力：山梨県河川課　H.11.12

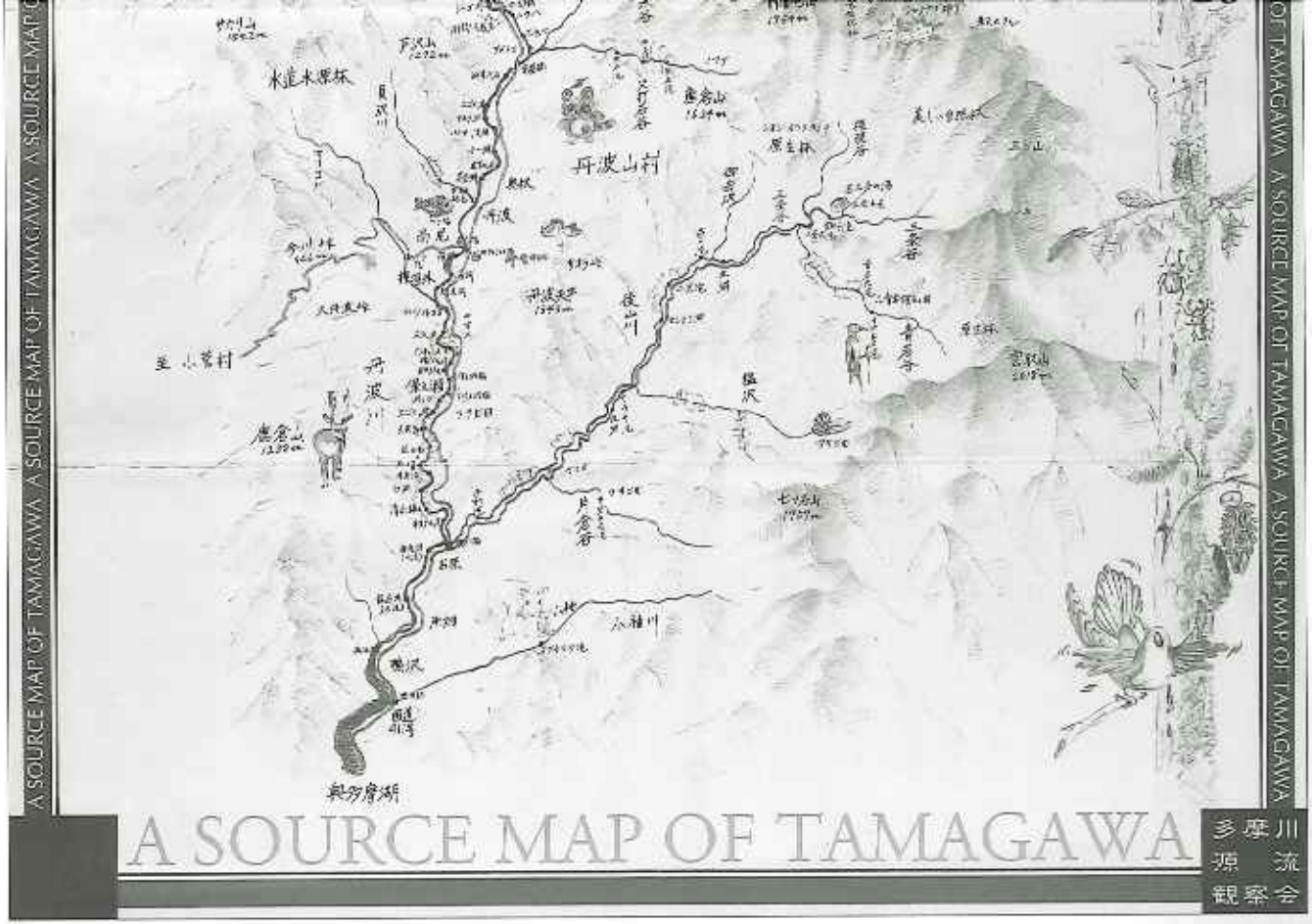
注意 現地はガイドなしに渓谷に入ることは大変危険です。ご遠慮下さい。

多摩川(塩山・丹波山)版 中面

別 多摩川源流絵図

A SOURCE MAP OF TAMAGAWA A SOURCE MAP OF TAMAGAWA A SOURCE

AMAGAWA A SOURCE MAP OF TAMAGAWA A SOURCE MAP OF TAMAGAWA


A SOURCE MAP OF TAMAGAWA
多摩川
源流
観察会
丹波山村
鹿倉山
小菅村
奥多摩湖
A SOURCE MAP OF TAMAGAWA A SOURCE MAP OF TAMAGAWA A SOURCE MAP OF TAMAGAWA

多摩川(塩山・丹波山)版 内容 (一部抜粋)

■多摩川の最初の一滴

1878年(明治11年)9月27日、当時の東京府史員の山城裕之氏は東京府の指示を受け多摩川源流探索を開始しました。3日後の30日には一ノ瀬の楠藤五郎氏の案内で、現在の山梨県甲州市塩山の笠取山の山頂直下にある「水干※」に辿り着き、ここを多摩川の誕生の地と定めました。その後1918年(大正7年)には東京市助役の宮川鉄次郎氏の発起により水神社が封建され、羽村水神社の奥宮として山の神、川の神が祀られました。

日本の河川の中でも最初の一滴に出会え、川の誕生を確認できる数少ない場所となりました。

多摩川は最初の一滴から水干沢を流れ、一之瀬川から丹波川そして奥多摩湖に流れ込み全長138kmの長い道のりを旅して東京湾に向かい下っていきます。

※水干…沢が山の斜面を登り詰め水が枯れてなくなる場所「沢の行止まり」を意味する言葉。

■花魁渕の悲劇

山梨県甲州市塩山上萩原に位置する遺跡、黒川金山。戦国時代から鉱山として武田家の財政を支え、その最盛期には黒川千軒と言われる程の賑わいを見せ、多くの遊女たちも囲われていました。しかし武田勝頼の時代には閉鎖に追い込まれ、ある満月の夜に宴が催されます。渕上に作られた舞台に遊女たちが集まり、宴が盛り上がりを見せた時に舞台を支える藤ツルが切り落とされます。一瞬にして55名の遊女たちが悲鳴を上げながら深い淵に消えていきました。この悲しい出来事から渕は「花魁渕」「五十五人渕」呼ばれるようになりました。地元では現在の花魁渕よりも、もっと上流の渕という説があります。

■イオ止め滝

竜神滝までの険しい谷から開放されて二股を過ぎて、しばらく進むと右から流れ落ちる小さい滝がイオ止めの滝です。この辺では魚をウオと言わずにイオと呼ぶ古い言い方が残されています。この滝から上には魚が住んでいないことからこう呼ばれているのだそうです。

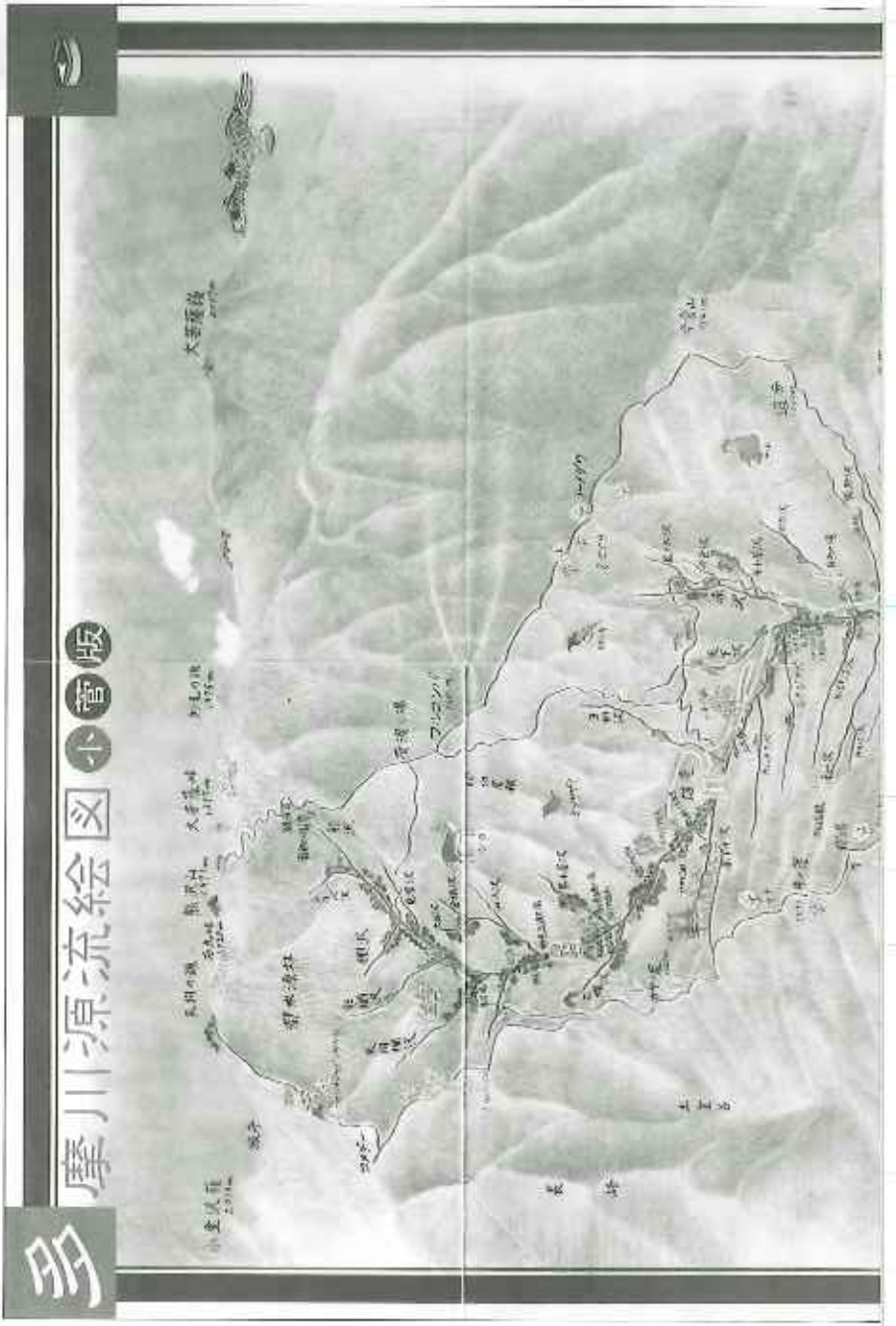
■ 小菅村版（2002年5月）

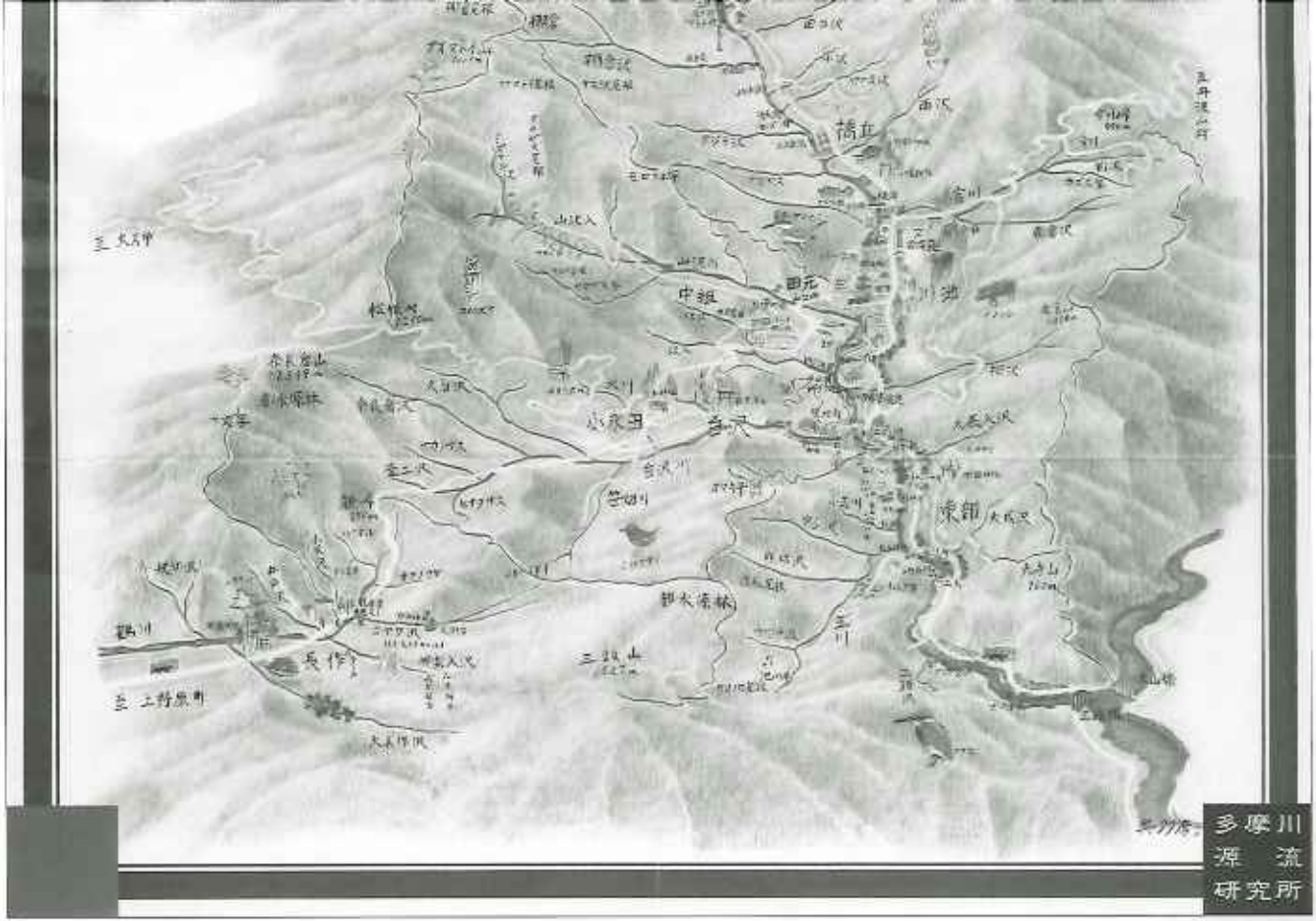
2000年から約2年間の調査研究をもとに2002年5月2日に『多摩川源流絵図小菅版』が完成しました。源流の里・小菅村の魅力が紙面いっぱいに描かれ、多摩川源流の小菅川、相模川源流の鶴川という二つの流れも克明に記されています。今まで耳にしたことはあっても渕や滝、尾根、小字に、なぜこの名前が付いたかの理由は分からず手付かずのままでした。今回の調査でその全貌が掴めたことの意味は大きく、貴重な財産を後世に残す資料となるよう『多摩川源流絵図小菅版』に記しました。

小菅村版 表紙

※絵図の裏面には滝や渕などの説明が記載されています。

小菅村版 中面





多摩川源流研究所

■源流の里、小菅村の魅力や価値が満載

立体感溢れるこの絵図は源流研究所の中村文明所長が小菅の渕や滝、沢、尾根、小菅村にある八つの地区の小字の地名と由来を村民の皆さんや小菅村職員の協力を得ながら調査・制作したものです。この『多摩川源流絵図小菅版』は3年前の『多摩川源流絵図塩山丹波山版』に続くもので、これによって源流域の山梨県側の滝や渕などの全調査が完了しました。絵地図は多摩川源流観察会の副会長、石川重人さんが担当。色鉛筆で鮮やかに表現された絵地図は立体感に溢れ自然豊かな多摩川源流域の様子が表現されています。また表紙を飾る妙見五段の滝はイラストレーターの進上絵里子さんの作品で絵地図の中に登場する愛らしい動物たちも彼女の筆によるものです。

（佐藤 英敏　小菅村総務課　企画担当［当時］）

■滝、渕、沢の紹介

『多摩川源流絵図小菅版』では小菅村にある全ての渕、滝、尾根などの名前とその由来の調査・研究をしました。

滝に関しては白沢滝、奈良倉滝、ヤチグラの滝、棚倉の滝、白糸の滝、雄滝、妙見五段の滝、天狗の隠れ滝、観音滝（音無の滝）など。

渕に関してはツリガネ渕、テンゴウ渕、占橋場の渕、釜ッ渕、浅間渕、精進渕、蛇石渕、ヤチグラの滝、平山渕、ドウドコロ渕、まがり渕、三太郎渕、センゴリ渕、清水渕、山の神渕、釜渕など合計48ヶ所を実踏調査することができました。

沢に関しては人成沢、大糸沢、棚沢、桃ノ木沢、獅子倉沢、西沢、竹の貝、小沢、中黒茂沢、白糸沢、今倉沢、赤沢、矢下沢、日向沢、鳥小屋沢、山人沢、金場沢、紅葉沢、クジラ沢、棚倉沢、カリバ沢、シオジクボ、カルメクボ、玉蝶沢、シンナシ沢、天狗棚沢、熊棚沢、棚沢、発沢、大白沢、ナカノサス、釜土沢、ハナオリド、小米沢、井戸沢、秋切沢、大長作沢、神楽沢、コヤケ沢、オキノカヤなど合計65か所を確認しました。

■8地区の地名と由来

さらに小菅村の8つの地区にある114の小字の地名とその由来に注目。小菅村の東部、白沢、小永田、中組、田元、川池、橋立、長作の各地区を回り長老や地

区の精通者に地名に関するいわれを聞いて回りました。

今回の調査で村にあるすべての小字に関して調査研究ができ、この絵図に記すことが出来ました。

■地名の由来

この『多摩川源流絵図小菅版』の作成にあたり多くの方々にお話を伺い、地名の生まれてきた背景とその変遷、そして、その名前に対する人々の思いなどに直接触れる貴重な機会を得ることが出来ました。身近な地名の一つ一つに人間の生活と文化と歴史が織り込まれた小菅村の地名は無形文化財として貴重な価値があります。

東部地区の余沢に「大成」と呼ばれる地名があります。ここは昔、富士講の通り道に当たり大変賑わいを見せ大寺、小寺、比丘尼寺と小さな集落に三つもの寺が立ち並んでいました。山間の緩やかな傾斜地に当たることから〈ナルい傾きのある大きな土地〉という意味で"オオナリ"と名付けられたのでしょう。

また長作地区に「牛飼」という面白い地名がありますが、ここで牛を飼っていたかと思い地元の長老に聞いたところ、彼は、その一地を〈牛会〉と表記していました。言い伝えによれば小菅村と隣の西原村との境を決めるのに双方の村から牛を歩かせ二頭が出会ったところを境にするという取り決めが成立し、その結果、現在の境界ができたということ。牛が出会ったところ〈牛会〉が「牛飼」に変化したのでしょう。地元では〈ウシゲエシ：牛返し〉つまり牛が出会って引き返したところという別名で呼ぶ人もいるように元々は〈牛会〉が正解だったのではないでしょうか。

地形の特徴を名前にした場所もあります。中組地区・山沢に「タナモクリ」と呼ばれる小高い土地がありますが地元の人に聞いても、その意味はわかりませんでした。調査が終わりに近づいた頃、村の長老に伺うと長老も意味を測りかねていましたが、その場所を〈タナモックリ〉と呼んでいました。

この土地は3段の棚から成り立っていて一の7段に集落があります。この地形をどこか高い場所から見下ろして、段々と続く高地の一番上にもっこりと盛り上がったところがある様子を〈タナモックリ〉と呼んだのでしょう。それがいつかいつの間にか「タナモクリ」に変化した地名だと思われます。

「源流絵図」小菅版の完成に寄せられた声

「源流絵図を探訪すると秘められた郷土の歴史に出会える」との声が寄せられました。地元のお二人の声を紹介します。

「源流絵図」小菅版作成について

小菅村教育委員長(当時)　小泉　守

源流絵図の小菅版が手元に届いた。絵図の出来映えもさりながら、源流域の名称や小字の出来が丹念に調べられていて素晴らしい。地名の発祥は地形、歴史、伝統などに由来するという絵地図でも「沢」「淵」「久保」のように地形から名付けられたものや「大糸ア」「ハイマゼ」「フリヤド」のように過去の生活様式の痕跡が土地に刻まれたものもある。これらの名称は昨今、自治体の都合で付けられた平凡の地名と違って、その背景や過程に先人の知恵や世の移ろいを読み取ることができ親しみがある。

「秋原村より米穀を小菅村の方へ送るもの此の峠まで持ち来たり明見社の前に置きて帰る小菅の方より荷を運ぶ者峠に置きて彼の送る所の何物を持ち帰る此の間数日を経ると誰も盗み去る者なし…」この一文は今から180余年前の甲斐国志(36巻、山の部の大菩薩坂)に記述されているものであり、絵図では「荷渡し場」を指しているものと思われる。米は当時にあって貴重な穀類でありそれが数日置いても無くならなかったことは現代人にとっても驚きであり、このことからして、いにしえの人々の倫理感を垣間見ることができる。

源流絵図を探訪していくと秘められた郷土の歴史に出会い埋もれた文化遺産を発見することができる。

小菅村文化財審議会委員(当時)　田中　紀計

多摩川源流研究所事業の一つとして作成された源流絵図は、この地を尋ねる人旅行者ばかりか村民にも大変有難いものである。村人さえもこの絵図の全てを知っている人はないと思う。

廣瀬村長、中村所長、佐藤主幹を中心として役場及び関係者スタッフの協

力・努力に対して厚く感謝する次第である。この絵図より流れ出た水は清く美しく多くの生命や草木を育て、古代より今日まで続いて来ている。将来に向けて源流研究所の設置は先見性の最たるものである。この絵図の各沢から湧き出す泉は天よりの恵みであり神に感謝しなければならない。

日本程水に恵まれた国は世界にはどこにもない。産油国は油より高い水を買って飲み生活している。30年後日本にも水については行政の一つの重大な仕事になるであろうと考えるものである。

竜喰谷（りゅうばみだに）

大菩薩峠

竜喰谷　出合い滝

■ 奥多摩版（2004年10月）

2004年（平成16年）10月多摩川源流域の渕や沢、滝、尾根など名称の確定と由来の聞き取り調査をもとにした「多摩川源流絵図奥多摩版」が完成しました。

第1弾の「多摩川源流絵図塩山・丹波山版」は5年間で420回もの調査を積み重ねて平成11年12月に完成。第2弾の「多摩川源流絵図小菅版」は2年間180回の調査で平成14年5月に完成。1995年（平成6年）の調査開始から数えると10年間にわたる源流実踏調査と地元への聞き取りを経て多摩川源流絵図3部作が出来上がりました。

■悪戦苦闘の日々を超えて

奥多摩町の日原川を中心とした実踏調査では地元の方々の聞き取り調査をもとに渓谷に出向いて渕や滝の名称の確認作業を丹念に行いました。奥多摩町は自宅から遠く悪路続きで、しかも現場は険しい崖をよじ登ったり深い淵を泳いだり悪戦苦闘を余儀なくされました。

しかし、どんな苦労も困難も忘れさせてくれる人々との感動的な出会いがあったことが大きな励みになりました。特に今回は奥多摩町の釣り名人である山崎進さんに出会えたことが最大の収穫であり、この方の存在なしには「多摩川源流絵図奥多摩版」の完成はなかったでしょう。

意識して地名を覚えたというより暮らしの中で自然と体が覚えていたのでしょう。びっくりするほどの記憶力で日原川の上流から下流までの渕や滝に関する名称や由来を克明に教えていただいきました。

また日原川大沢周辺のことは天野信弘さん、倉沢谷は坂和津さん、川谷川は大野喜芳さん、梅沢川は新和雄さん、大丹波川は加藤俊雄さん、峰谷川は原島勝男さん、鷲岳渓谷は島崎重雄さん、奥平道男さん、鳩ノ巣周辺は佐久間正好さんから、それぞれ大変丁寧なご指導をいただくことができました。

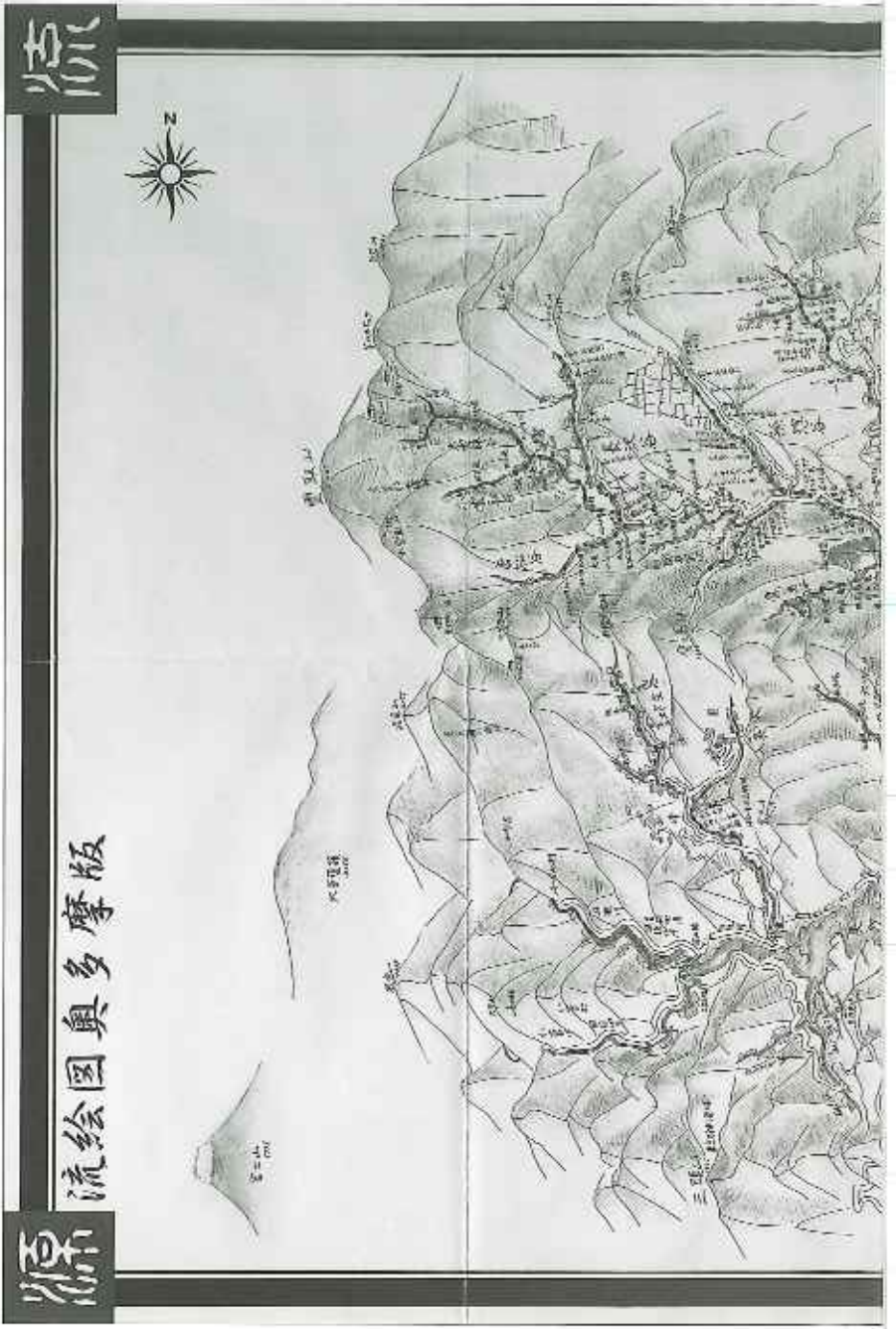
また日原川では自治会長の小林操さんの呼びかけで山崎信三さん、原島源治さん、黒沢幸雄、原島寛さん、千島国光さん、小林孝さん、原島茂郎さん、人倉真さん、山崎豈さんらの協力をいただきました。

そして奥多摩町役場の企画財政課の担当者をはじめ多くの地元の地区の精

通者の方々といった大変多くの方のご協力とご指導を受けながら完成へと辿り着く事が出来ました。

奥多摩版 表紙

奥多摩版 中面



給

とうきゅう環境浄化財団助成事業

図

■場の特徴を生かしたユニークな名称

「多摩川源流絵図奥多摩版」の第一の特徴は、地形や場の特性を表現したユニークな名称が数多くあることです。ヒカリ石、岩清水、曲がり尾根渕、大坪滝、男釜、女釜、イモアライ滝、バケモノ渕、アミハリドウ、メメズギャーラ、瀬波、鳴瀬、百尋の滝、四十八滝、獅子の口など一つ一つの場所の特徴を実によく観察して名前が付けられています。

古の人たちの洞察力の鋭さと同時に自然への感謝や愛着、畏敬の念などが色濃く反映されています。なかでも村と隔絶された日原の入り口になることからこの名前が授けられたという戸望岩は、対するだけで自然のエネルギーの凄まじさに圧倒されます。

第二の特徴は、奥多摩が人間と自然との関わりが極めて高い地域で、そのことを示す数多くの地名が刻まれていることです。山村の生活は大昔から川や森に大きく依存し、人々は釣りや山菜採り、キノコ採り、狩猟などで日常的に山や渓谷、森へと入り込んでいました。そして獲物を取るためには急で険しい渓谷や山々にも出かけ怪我や不幸な事故も多発したのでしょう。ゼンベイ滝、ゼンダナ渕、キムラ渕、サクガ渕、キンザ渕、お花ドウ、イザエモン渕、オタツが滝、おみっちゃん河原、オヨウ渕、クエモンの大渕、源五郎滝など、怪我や滑落を繰り返さないためにも事故に遭った当事者の名前を渕や滝に刻んだのです。

■源流域の山の仕事や暮らしを反映

第三の特徴は、木材の生産と搬出など山の仕事や暮らしに関わる地名が残されていることです。

林道が作られたのは戦後のことで、それまでは木場道や谷川の流れを利用した搬出が多く、川の流れをせき止めた鉄砲出しがよく行われていました。日原川では三か所で行われ最上流から順に一番出し、二番出し、三番出しと呼ばれていました。また紙すきの材料になったミツマタが近くで産出したことからミツマタ出会い渕や、木材流しの最盛期の頃には大人の世話をしたという茶坊主や荷物を持ち運びするモチコも働いていたことから茶坊渕やモチ小屋渕などの名称も残っています。

■修行や祈り自然信仰に関わる

第四の特徴は修行や祈り信仰に関係する地名が数多く見られ、聖流、御供所、精進場、セッチン場、仙人の滝、行者の滝、安堵渕、尼が淵、山王大淵、霧立ち姫、弁天岩、梵天岩などの地名が各地に残っています。奥多摩町には江戸時代以前から山岳信仰の対象地となった天祖山や御嶽山、大岳山など信仰の山が数多くあり関東各地から信者が参拝。信仰の山に行き来する道中に修行や祈りに関する数多くの地名が刻まれたのでしょう。

「源流絵図」奥多摩版の完成に寄せられた声

「多摩川源流絵図」三部作に寄せて

特定非営利活動法人全国水環境交流会代表理事(当時)　山道　省三

多摩川源流絵図三部作が完成した。この絵図作りのために払われた努力は事前調査、現地調査、古老へのヒアリング、さらに確認調査そして原稿作成、印刷などを積み重ねると、ゆうに10年の大事業となっている。1999年に第一部作となった「塩山・丹波山版(平成11年12月発行)」を最初に見せられた時、全身が総毛立つような感動を覚えた。「源流に夢とロマンを求めて」とサブタイトルが記されているものの、絵図から伝わってくるものは作者である中村文明氏の五体を通じた源流の底知れぬ「気」であったように思う。作者は行政や学者が研究や調査対象とすることもなく、ただ古老の頭の中に伝承されたままのものを現場と照らし合わせながら、ひたすら記録していく。源流域の過疎化、林業の衰退の中、時間との戦いであったと述懐する。そして中村氏を支え、あらゆる場面で力になった多摩川源流観察会の人たちのことも忘れてはならない。この偉業はただ多摩川源流にとどまらず全国の源流で活動する人たちにとっても励みになる。各地で同様のマップ作りが促進されることを望みたい。

多摩川流域ネットワーク代表(当時)　長嶋　保

このほど多摩川源流絵図奥多摩版が完成した。1999年に本川に関わる塩山・丹波山版が刊行されて以来、2002年に小菅版が、そして2004年に奥多

摩(本川と日原川)版が刊行されたことで、ついに源流三部作が整ったわけだ。この絵図作り、調査に費やした時間を入れると、おそらく10年に近い大仕事だったに違いない。

ここに描き出された多摩川の源流域は東京都の水源涵養林になっていただけに全く手つかずの自然が広く残されてきた。それだけに急峻な幽谷や鬱蒼たる森林が発達して四季それぞれの豊かで美しい景観を作り出している。

この源流域のあるがままの自然に着目し、その支流・沢筋・滝・渕・尾根・頂きなどを実地踏査し、さらには古老からの聞き取り調査なども加えて地名とその由来を全面的に明らかにしたという。時には「道らず」などと呼ばれてきた人跡未踏の場所へも決死の調査を敢行したようだ。その結果、数多くの源流地名が一枚の大きな俯瞰図に描き込まれたのだ。さらに裏面には支流や沢ごとに図示された地名が積年の調査・研究の成果に基づいて一つ一つ解説されている。そこからはこの地に住んだ人々の自然への畏敬や愛着、関わりを持った暮らしや伝承・歴史などが伝わってきて手にした人の心を揺する。また随所に四季折々の写真が散りばめられていて楽しい。この絵図作りの中心となった写真家・中村文明氏の力作だ。「小菅版」だけだが源流散策コースや小菅の湯、宿泊施設などの案内もあって気が利いている。このような源流域の地名絵図は今までに全く類書がなかった。おそらくこれ以上のものも現れないであろう。最初にして最後の多摩川源流域地名の集大成と言えよう。

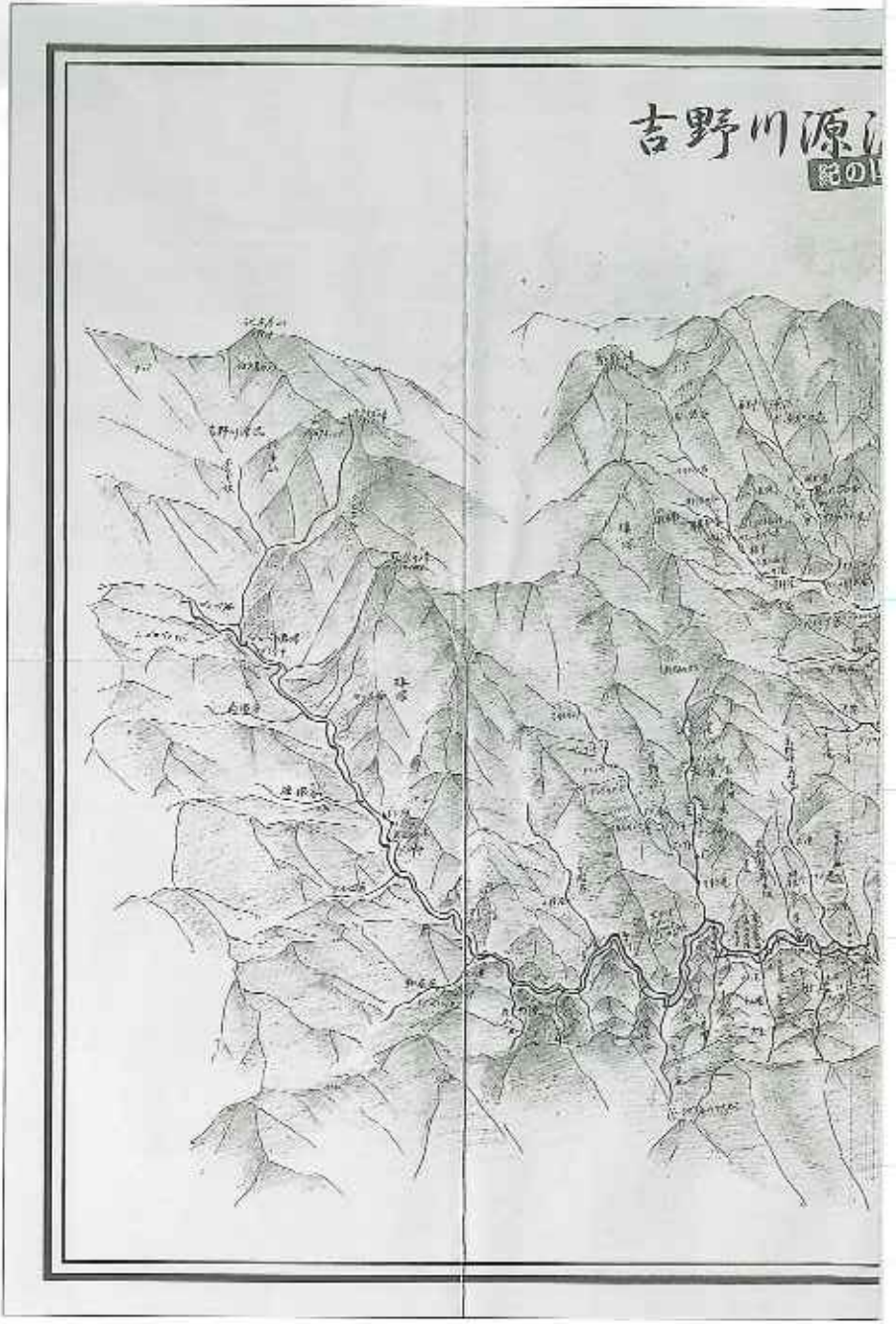
奥多摩湖

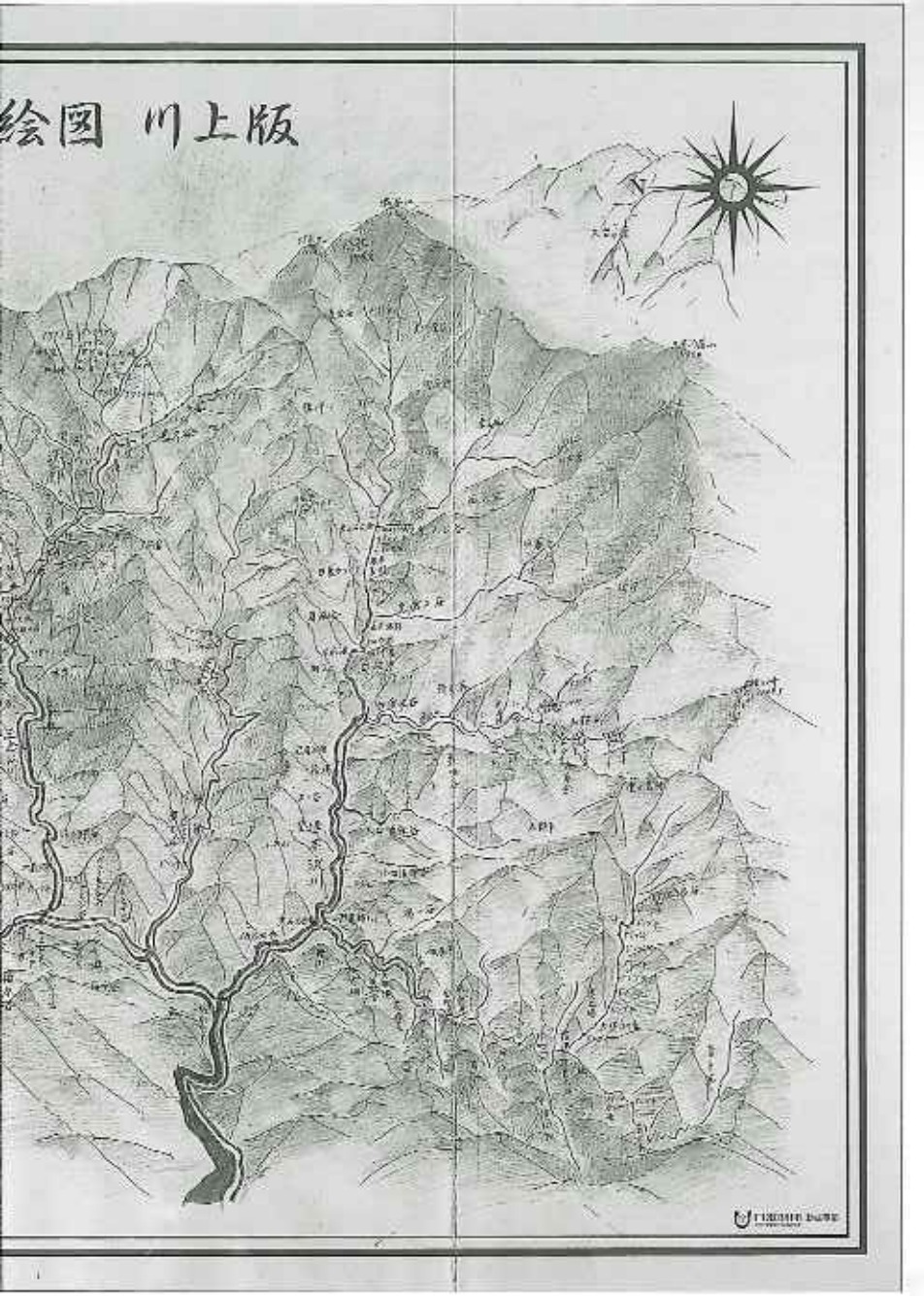
■ 吉野川・紀ノ川版（2006年3月）

平成18年3月、4年前からNPO法人全国源流ネットワークとして取り組んでいた「吉野川・紀ノ川源流絵図」が完成しました。塩山・丹波山版、小菅版、奥多摩版に続く四作目にあたります。

吉野川・紀ノ川 表紙

吉野川・紀ノ川版 中面




绘图 川上版

■紀ノ川・吉野川版の内容

川上村の森と水の源流館の協力のもと、本沢川、三之公川、北股川に焦点を当て、その流域の渕や滝、尾根や沢の名前と由来を記録し詳しく紹介しています。とりわけ三之公川は南北朝時代の歴史的舞台にもなった由緒ある場所。穴の口、地蔵河原やヤケヤマ谷、オオゴロッタ、ウバ谷、キノコ股谷、カモシカの立倉、シカの走り、カクシ平、御陵の谷など地元の暮らし、文化や歴史が色濃く反映した地名が60か所、本沢川は30か所、北股川は19か所、それぞれの名称と由来が挙げられています。

吉野林業の発祥の地といわれる川上村。吉野川源流で優良な杉を育てるための品種改良や林業技術の研鑽など様々な努力が積み重ねられ、この地に日本林業の礎を築きました。森と共に生きる、そのための森づくりを川上村の歴史は教えています。

制作にあたって日本財団や中平寛司さんをはじめ、多くの方にお世話になりました。

「源流絵図」紀ノ川・吉野川版の完成に寄せられた声

命名の意図が明らかになった

財団法人吉野川紀ノ川源流物語事務局長（当時）　坂口　泰一

平成6年にそれまでの村づくりや今後の方向を「吉野川源流物語」にまとめ上げました。そして平成8年に「川上宣言」を全国に向け発信しました。「川上宣言」の一節にある「私たち川上はかけがえのない水が作られる場所に暮らすものとして下流にはいつもきれいな水を流します」という宣言を実現していくことを川上村の村づくりの中心に位置付けています。その具現化の一つとして吉野川（紀ノ川）源流部に広がる原生林740haを購入。「吉野川源流水源地の森」として保全していくこととしました。その山に現地の人の案内で入った時に尾根や谷、滝の名前などで地図にない名前を聞いた時、漠然と「詳しい人に名前を聞いて整理する必要があるな、そんなことができたらいいな」と感じていました。そんな時、中村文明氏に出会い「川上版源流絵図」の構想を聞き即座にお願いすることにしました。今、全国的にもそうであるように源流部の

地名や暮らしの知恵は人の記憶の中にある間に聞き取りをしておかなければ永遠に消え去ってしまいます。幸いにも「水源地の森」の尾根や渓谷にある地名やその命名の意図が源流絵図によって明らかにされました。地名の数々を見るとき、それは古くから人間と山の関係が作られてきた証であり猟師と獣との戦いの跡や、人狗や想像上のモノに例えた知恵は自然の力に対する畏敬の念でもあったようで当時の人間の有り様が伝わってきます。山村の民俗を語る際に重要な役割を果たしてくれるものと思っています。「源流絵図」は奥深い山に何百年を生きてきた巨樹に出会い太古の姿のまま時が止まっているような風景に出会えるようなそんなロマンを感じさせてくれます。

庶民の歴史が色濃く残る

NPO法人樹木・環境ネットワーク協会専務理事　渋澤　寿一

吉野川の源流域は時の「権力の森」として歴史にしばしば登場します。神武東征ではヤタガラスが神武天皇を大和へと導いた森であり、南北朝の時代には南朝の皇子たちが隠れ、再興を夢見た森でもあります。源流絵図の中にも南朝由来の地名が多く見られます。沢に沿った急峻な崖にへばりつく道は登山靴の足元すらおぼつかないのに、かつての兵や公家たちの難行を思うと哀れすら感じます。皇子を匿っていた家系の人々は今もそのことを誇りに思い、山の中であるにもかかわらず人々は絶えず都を意識しながら暮らしてきました。ところが、この絵図に書き留められた一つひとつの沢にはそんな権力者たちとは無縁な庶民の暮らしの匂いが色濃く残っています。猟師、焼畑の人々、樵、木曳き、炭焼き、木地師、川魚漁師、筏師、そして拡大造林に伴う伐採と植林に携わった人々。彼らが生活の中で名付けた森と沢の数々。その人々の「生きた証」の縮図がこの絵図であることに気づきました。源流という言葉からは人を寄せ付けない圧倒的な自然が連想され世間一般の解釈もそのようになっています。しかし、この絵図の語源流の森は豊かな自然と人の生活が作り出した共存の森であることを私に教えてくれました。

■ 熊野川・天之川版（2009年9月）

第10回全国源流シンポジウムに向けて制作作業が進められていた熊野川源流天之川版が平成21年9月12日に完成。シンポジウム参加者をはじめ村民や天川村を訪れた方々に配布されました。

■熊野川・天之川版の内容

近畿地方の最高峰である八経ヶ岳（標高1915m）や弥山（標高1895m）、山上ヶ岳などの大峯山系から流れ出る熊野川は三重、和歌山の県境を貫流し183kmを旅して紀伊半島の先端に注ぐ。熊野川源流一帯は日本古来の山岳信仰の聖地として役行者や空海をはじめ様々な高僧達がこの地で修行を重ねました。また八百万の神を敬う自然信仰を原点とする本来の神道と大陸伝来の仏教などの神仏習合の聖地としても信仰を集め、日本人の魂の故郷として発展してきました。

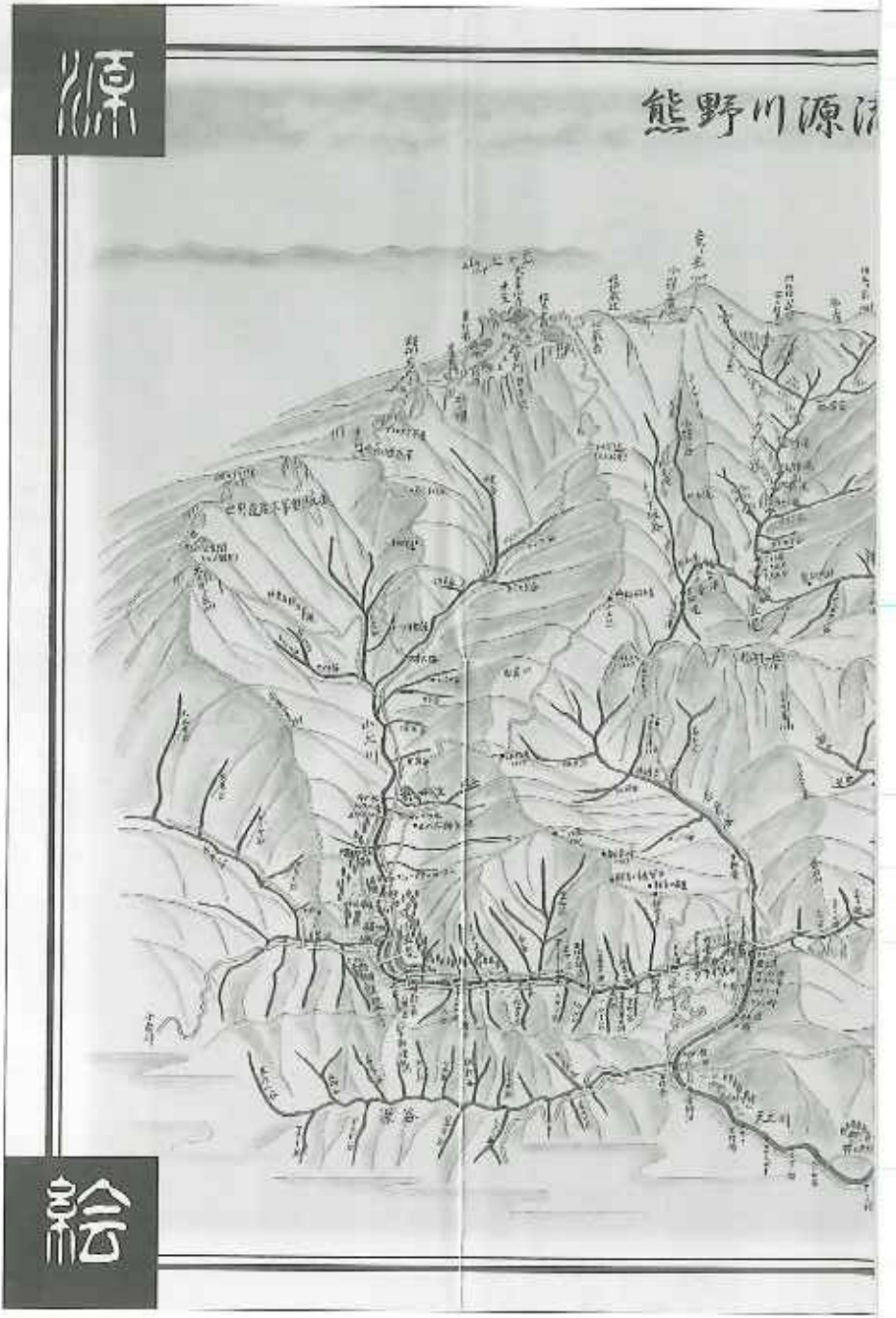
「熊野川源流天之川版」では熊野川源流の自然や文化歴史に着目し源流域にある渕や滝、修験道や山岳などの名称と由来の調査を実施。記録と保存に努めるとともに次の世代に継承するために天川村とNPO法人全国研究ネットワークが神橋さんをはじめ多くの地元住民の方々のご協力を得ながら共同で作成しました。また、今回の事業は河川環境管理財団の支援を受けての実施でした。

■日本人の魂の大本、熊野川源流の魅力

平成16年7月に「紀伊山地の霊場と参詣道」として、1300年の歴史を刻む霊場「吉野大峯」と、参詣道「大峯奥駈道」は高野山、熊野三山とともにユネスコ世界文化遺産に登録されました。日本百名山を記した深田久弥は「大峯山は我が国で最も古い歴史を持つ山である。655年（斉明朝元年）役小角は22歳で大峯山の上で苦行したというから、これを登山記録と見れば日本最古であろう。今、多数の人が大峯詣りとして登山するのは、その中の山上ヶ岳であって信仰を現わす多くの石碑が立ち並び、頂上には金剛蔵王権現を本尊とする大きな本堂がある。そしてこの峰だけは今もなお女人禁制である。大峯山の代表と見直していいだろう。」と紹介しています。

熊野川・天之川版 表紙

熊野川・天之川版 中面



流
絵図 天之川版
N
図
河川環境管理財団助成事業

全国源流ネットワーク会員(当時)　豕瀬　充

熊野川源流絵図の発行にあたり手にとって見せていただいた時に中村所長と歩いた「山・川・谷」の全てが思い出されます。この絵図を作成するための源流資源調査で地元に住みながら初めて分ける谷や沢もあり毎度ワクワクしながらお付き合いをさせていただきました。中村所長はお年(失礼)にもかかわらずふくらはぎが発達して山歩き、沢歩きが強く、さすがに全国の源流を歩き回っているだけのことはあると感心しておりました。

一連の調査の中で最も過酷であった神童子谷遡行でノウナシ谷を上り詰めた時でした。ノウナシ谷には熊野川の最源流ともいうべき村内で最長の河川です。水源は世界遺産である大峯奥駈道が通る竜ヶ岳となっております。

竜ヶ岳は不思議な山で1,725mの標高の頂上直下で水が湧き出しており修験道の霊所として重要な「小篠の宿」の水源地ともなっておりました。

この山域を子どもの頃からよく知る先達であり猟師でもある神橋さんにガイドをお願いして標高900m付近の林道終点から歩き始めたのですが最初は"へっついさん""赤銅の滝""釜滝"と景観の優れた場所を順調に通過していたのですが落差40mのノウナシ谷からいよいよ厳しい道のりとなり地蔵滝、馬頭滝、千手滝と越えて行くのに滝のサイドを高巻きしていくのですが傾斜が45度を超える場所もあり滑りやすい足場の中で体がカチカチとなって変な所に力が入ってどうにもこうにも疲れ果ててしまいました。二人は長年のガイドの神橋さんについていくのがやっとでクタクタになりながら奥駈道に到達したのが午後6時半を回ったところでした。そこから宿泊予定の山上ヶ岳の宿坊までは約1時間の距離ですが辺りが真っ暗に日が落ちたこともあり1時間半を要して山上ヶ岳に到着いたしました。

危険は感じていませんでしたが、ちょっと無茶な源流資源調査でありました。一応ノウナシ谷には敗退した結果となりましたので中村所長とリベンジしようと約束しています。絵図の中でノウナシ谷については一際細かく書き込みが行われています。中村所長、大変ご苦労様でした。そして、ありがとうございました。

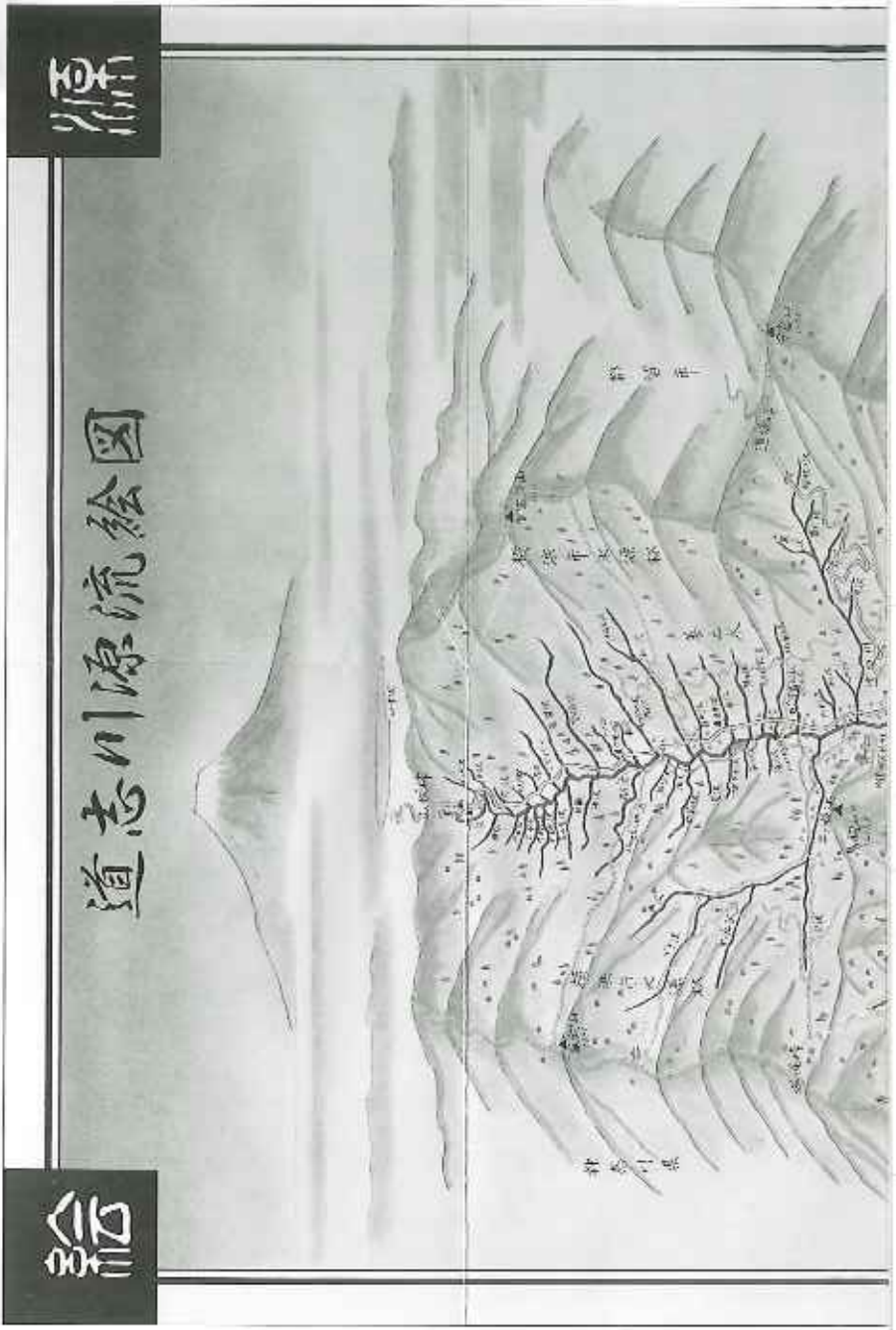
■ 道志川版（2010年10月）

道志村は山梨県の東南端、神奈川県境に位置する東西28km南北4kmの細長い木の葉の形をした山あいの村です。その中央に道志川が流れ葉脈のようにたくさんの沢が注ぎ込んで美しい流れを作っています。また川に沿うように走る道志道は古くから道志七里と呼ばれ、山間の抜け道沿いの集落として古くから栄えました。

私たちはこの道志川流域の自然や文化、歴史に着目し源流域にある沢、渕、滝などの名称と由来の調査を実施。記録と保存に努めると共に次の世代に継承するためNPO法人全国源流ネットワークが住民の協力をいただきながら共同で「道志川源流絵図」を作成しました。

道志川版 表紙

道志川版 中面



沿川
N

■道志七里と柳田國男

1953年(昭和28年)10月に完成した道志村誌「道志七里(伊藤堅吉著)」は、村の位置や自然、歴史、字、屋号、さらには伝説や縄文弥生文化など道志村のあらゆる分野の資料が克明に記録され識者から「歴史と民俗を巧みにマッチした名著」「異色の村誌」と評価されています。

遡ること44年前の1909年(明治42年)5月12日。民俗学者の柳田國男が道志村を訪れていました。谷村(都留市)から道坂峠を越えて村に入り、村の立地条件、人口の推移、産業の実態など詳細に調査し報告書にまとめています。この報告書をもとに柳田国男は「道志七里」に序文を送りました。その中で道志村は立地的に農業が難しく、当時の産業であった炭焼き、馬の飼育、蚕桑なども厳しい。今後は村民の労働をもとに植林を積極的に進めて新たな活力ある林業を起こすべきと唱えたのです。これは彼の洞察力と秀でた観察眼から生まれた素晴らしい提唱でした。

■横浜市の先見性

近代水道の発祥地の横浜市。その水源である道志川が流れる道志村に横浜市水道局が管理する広大な水源涵養林があります。その歴史は古く、横浜市が水道の水源を守るため1916年(大正5年)に山梨県から山林2,780haを買収した時から始まりました。今から100年も前に水道水源林を管理・経営した横浜市の優れた先見性は改めて評価されるものでしょう。

豊かな森林は豊富な降水量から水量も多く、その水質は船乗りの間では"道志の水は赤道を越えても腐らない"と言われるほど極めて良好なものです。

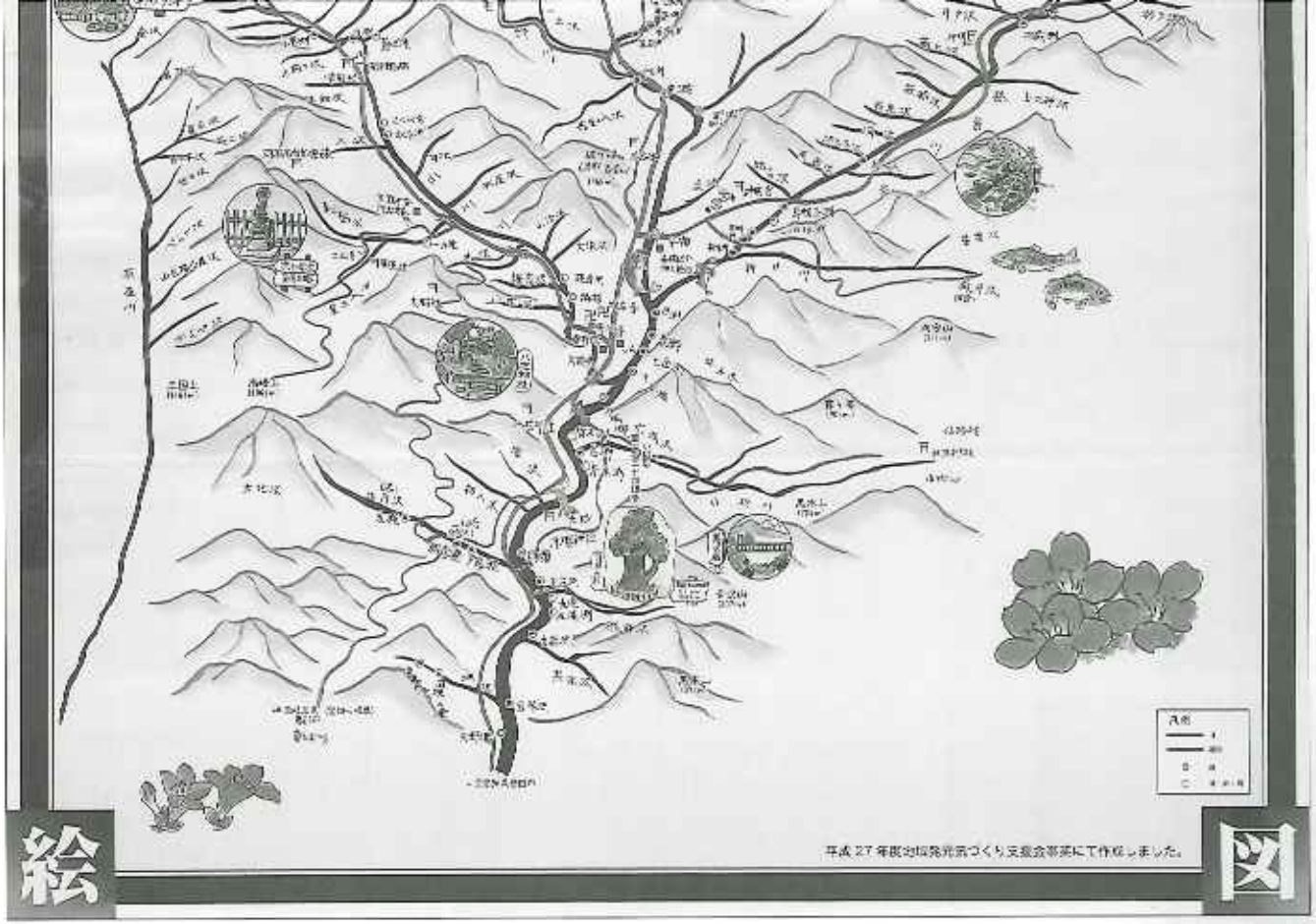
地球温暖化が急速に進展する中で森林再生が大きな課題になっている今、横浜市水道水源林は水源と大都市が共に支える水源の森の経営モデルとして新たな注目を浴びています。

■ 矢作川版（2015年8月）

根羽村は長野県の最南西端に位置する源流の郷です。南は愛知県豊田市、豊根村、西は岐阜県恵那市、北は長野県平谷村、東は長野県売木村にそれぞれ接し、矢作川を中心に23の集落が散在しています。村の中央を川に沿って国道153号（旧三州街道）が愛知県足助、更に岡崎・名古屋方面へ通じています。さらに村の中心部より南に三州吉田（現愛知県豊橋市）方面へ通じる吉田一新城道が分岐しています。歴史的には江戸時代から明治にかけて交通の要衝として中馬宿として栄えました。明治以来、森林整備に力を注ぎ、夏季の高温多湿の気候とあいまって長野県内でも有数の杉・檜の美林が造成されています。近年では林業の復興で注目を浴びトータル林業の発展に尽力しています。

矢作川版 表紙

矢作川版 中面


絵
図
平成27年度地域発元気づくり支援金事業にて作成しました。

■沢が多い矢作川源流

矢作川源流は水量が多く、根羽村全体を沢が走っています。矢作川源流の水源地からは水が豊富に流れ落ち簡単に手に汲んで飲むことができます。その周辺には「ワン、ワン」と鳴く「ネバタゴガエル」が生息しており、運が良ければその鳴き声を聞くことができます。

■親が植えて、子が育て、孫が伐る

林業は息の長いもので、野菜や稲作のように春に種を蒔いて秋に実るというものではありません。「親が植えて子どもが育てて孫が伐る」のが根羽村の林業哲学です。

大正9年(1920年)に国が公有林野官行造林法を制定し、地方の森林整備の支援に乗り出しました。国が植林から山の手入れまで管理し伐採まで行い、50年経って山を売った時には売り上げを半分ずつ分ける。それが官行造林の分収林制度です。大正9年(1920年)にその法律が出来て、大正11年(1922年)から根羽村は国と1,300ヘクタールの契約を行いました。

森づくりは、少なくとも三代はかかりますが、その三代かけて杉や檜を育てるサイクルが明治の頃からきちんと確立されて、今なお根付いているのが根羽村の山づくりの特徴です。

■村長は森林組合長、全戸が森林所有者

根羽村は村の森林面積の57%を占める約6,400ヘクタールの村有林を所有していました。

明治40年(1907年)当時の村役場の理事者たちは、とても全ての村有林を村役場だけではまかないきれないと判断し、それを全戸に2.5ヘクタールずつ貸し付ける決断をしました。さらに各集落単位で一戸当たり3ヘクタールの分収林を貸し与えたので根羽の村民は全員が5.5ヘクタールの森林所有者となりました。山は村の所有ですが、山に自分で植林した木は自分の木になるので、植えた人は自分の山ように大切に手入れを行いました。

全世帯が昭和30年代に林業によって豊かさを味わっていますが、こうした経験が林業に熱心に取り組む一番の源になっています。

矢作川

月瀬の大杉（根羽村）

矢作川源流

源流体験教室
(2005年8月)

源流体験教室
(2007年8月)

源流体験教室
(2011年7月)

4つの主な事業

源流体験教室

源流体験教室

源流体験教室とは…

自然と親しみ、自然とふれ合う中で豊かな心と生きる力を育んでいくことを目標に、多摩川の源流(小菅川の上流)に源流体験教室を創設し源流に直接触れる体験ゾーンを整備。学校や児童館、育成会や親子で豊かな源流を体験できる場所と機会を設けました。日常の世界から離れ源流との出会いは子どもたちの心に得難い感動と喜びを刻んでくれるものと確信します。さらに源流体験は水や、川、森など自然環境に対する理解と関心を深める絶好の機会となり自然を大切にする心を育んでくれるでしょう。

■源流体験教室のテーマ

①〈理解〉源流と親しくなり自然を愛する心を育てる

源流体験教室の狙いは源流への理解を深めることです。子ども達にとって未知の源流との遭遇は驚きと感動をもたらし、例えたった一回の経験でも源流が心に深く刻まれ決して忘れることはないでしょう。また水が命を育てお互いが支え合って生きている姿を知ることを通して自然への理解を深め自然を愛する心を育てていきます。

②〈自立〉厳しい源流を自分で判断して自分の力で歩く

源流には道はありません。どこを歩くかは自らがよく観察し自分の歩く道を自分で決めます。自分の力を信じて失敗してもいい、転んでもいいから自分の責任で前に進みます。

③〈意欲〉ワクワクする好奇心とヒヤヒヤする冒険心を育てる

源流の自然の素晴らしさに触れれば心はさわやかになり源流からたくさんのエネルギーやメッセージをもらうことができます。変化に富んだ険しい源流を歩くことでワクワクする好奇心が芽生えヒヤヒヤする冒険心を掻き立てます。こうした体験は子どもたちの心を元気にして未知の世界への挑戦と意欲を育てます。

④〈責任と忍耐〉危険と向き合い自己責任と忍耐を身につける

源流はどこにでも危険が潜んでいます。自然は美しいが厳しい。油断すると滑って転び怪我をしたり、痛い思いをします。まず自分の安全は自分で守る自己責任を心がけます。小さな危険を体験し危険と向き合うことで大きな危険を未然に防ぐ経験を積んでいきます。

■ 昭島市の成隣小学校4年生が「源流体験教室」を体験（2001年10月）

2001年10月4日、昭島市の成隣小学校の4年生が校外学習の一環として小菅村を訪れ「源流体験教室」を体験しました。当日の参加者は生徒94名と保護者、教員合わせて130名。渓谷沿いの源流体験コースを学校行事として行うのは初めてのことでした。

一行は午前11時に大型バス2台で源流研究所に到着。体験教室でのマナーと心得を聞いて一人ひとりがヘルメットを装着し、3組に分かれて小菅川の上流へと向かいました。

水温は10度。「冷たい！」と悲鳴を上げながらも中村所長から川の歩き方のアドバイスを受けながら元気に源流を進みます。赤沢出会い下渕では「正面の岩盤に激しくえぐられた跡がありますが、これら一つ一つが大きな洪水によって作られたものです。源流の岩や石、流れや水の色までよく観察してください。」という説明に聞き入っていました。

体験した母親は「立ち止まって川の音を聞きながら、岩や木や水の色そして石の形を見ては、川の静かな顔と強い顔を見ることができました。スタッフのお話を聞いて瀬と淵を見ると自然は無限の力でできてるんだと感じ、源流から勇気をもらいました。」と感想を寄せてくれました。

昼食後は白糸の滝を見学しスタッフからアオダモなどの樹木の解説を受けて森を楽しんでいました。

体験者の感想

●源流体験で一番心に残ったことは流れの強いところを石につかまりながら歩いたときです。そのときは体が流されそうでしたが石につかまりがんばったので歩けたと思います。
頑張っただけでなく井村さんや小木先生などサポート隊の方々が応援してくれたからだと思います。

●川へ入ってみると予想していた冷たさではなく、とっても冷たかったです。まるで氷の上を裸足で歩けるような感じでした。一歩歩くごとに自分の足が凍っていく感じでした。少し川を歩き回っていると木が竜の形に似ていたので中村さんに「あの竜の形に似ている木は人間がわざと作ったの？」と聞くと「川の流れ、台風の雨などであの様になったんだよ」と教えてくれた。私は聞いたとき川や自然ってすごいなぁとびっくりしました。

●川の水の「ゴー」「ザー」と音が出て少しドキドキしてきました。ヘルメットをかぶっていたので少し安心しました。でも、ここからが本当の源流体験です。「バッシャーン」だんだん靴下に水が染み込んできて足に水がきました。私は「冷たぁーい」と言いました。みんな真剣そうに川を辿っていきます。水が早く流れているところに行ったとたん私は流されそうでした。

●いよいよ源流体験が始まりました。とっても冷たくてびっくりしました。スタッフの佐藤さんの指示に従って歩いてきました。最後に3分間だけ自然を感じました。空は緑色で水はキラキラ透き通って青々としてとても綺麗でした。

■ 山梨県立ろう学校で「源流体験教室」を体験（2002年5月）

2002年5月16日、山梨県立ろう学校中学部が宿泊体験学習として「源流体験教室」を体験しました。参加したのは県立ろう学校中学部の生徒4名と先生6名の合計10名。源流研究所からは中村所長、佐藤事務局長、井村主任研究員が対応しました。源流研究所での開講式では佐藤事務局長が小菅村の人口や特産物などをわかりやすく紹介し、中村所長が教室の目的と狙いを説明。昼食後に元気に出かけました。現地では源流に入るにあたって中村所長が「源流には道はありません。源流の流れをよく観察し自分で判断して自分の責任で歩きます。自分の安全は自分で守ってください。」とアドバイス。赤沢出会い下渕、たわおれ渕、釜渕、のぞき渕とコースを回りました。

生徒の日野原優君は「とても楽しかった。川の流れが速く厳しい登りだけど面白かった。またいつか登りたい。」と感想を述べました。

また大村哲雄先生からは「自分の目で見、耳で聞き、考えて行動する。体験の積み重ねはとても大切だと思う。学校で得た知識を自然の中で活用してみる。使えないものもあることをしり自然の中から学び得る。そういった意味でこの源流体験はとても意義のある活動であると思う。」と。

そして竹内陽子先生からは「自己責任のもと自分で考えながら安全に気をつける体験は日常の中ではあまり意識されませんが今回の経験でそれについて意識する良い機会となりました。また人自然の美しさと力強さを肌で感じることができました。」と、それぞれ感想を寄せて頂きました。

山梨県立ろう学校中学部の源流体験教室の様子

■ 共感の輪広がる源流体験教室（2002年）

■川崎、穂積、稲城、三鷹、調布、日野、多摩、太田、昭島、山梨などの各地から源流へ

2002年の夏、源流体験教室に熱い視線が注がれました。

2002年5月の山梨県立ろう学校を皮切りに、7月に小菅小学校五年生の皆さんと川崎水辺の学校の皆さん、そして8月には穂積町教育委員会の親子の皆さん、稲城市青少年委員会のジュニアリーダー育成合宿の皆さん、三鷹市教育委員会青少年会館の皆さん、調布市児童館の皆さん、日野市ふるさと博物館の親子の皆さん、稲城市青少年地区委員会の親子の皆さん、9月には多摩市諏訪小学校の皆さん、大田区多摩川探検隊の皆さん、昭島市の成隣小学校の皆さんがそれぞれ源流体験教室に参加。

2001年の源流体験教室はモデル事業で取り組みましたが、川崎と昭島の2地域にも関わらず参加者からの反響は大きく、確かな手応えをつかみました。

■水辺の学校3年ぶりの願いが叶う

2002年8月6日～7日に狛江市の水辺の学校、総勢51名が源流体験教室に参加しました。源流研究所周辺で昼食を食べた後に源流へ向かいました。小学一年生2名、二年生2名、また中学三年生もいるといった多彩な顔ぶれ。現地で教室の目的、注意事項などの説明の後、準備運動を行ってスタートしました。低学年が多いので、どのようにサポートするか思案のしどころでしたが、自分の力を信じて自分の責任で歩かせる。どんな環境を整えれば低学年でも歩けるか考え、流れの速いところに多目のサポートを配置し安心感を与えました。低学年は体力がないので前半で長く水に入れません。大人のサポートに加え中学校三年生の赤坂くんにも加わってもらいました。子どもたちが滑っても転んでも手は出さないようにしました。

子どもたちが困難に負けず、小さな身体を張って源流の流れに立ち向かう。子どもたちのはつらつとした姿に親たちが励まされていました。

釜渕では低学年も含めて全員がヒヤヒヤドキドキコースに挑戦。最後の瞳渕では、多くの子どもが源流の冷たく綺麗な淵に入っていきました。中にはドボンドボンと何度も飛び込む子どもも現れ、子どもたちが源流の夏を楽しみ

ながら川の源の姿や様子を心と体で存分に受け止めていました。夜の御鷹神社のムササビ観察会では、かわいいムサリビが巣穴の中から顔のぞかせ赤色灯の光に反射した瞳がキラキラ光る様子に子どもたちは歓声を上げて喜んでいました。

源流体験教室アルバム

2005年8月

2006年7月

2006年8月

2007年7月

2007年7月

2007年8月

2008年8月

2009年8月

2009年8月

2010年7月

2010年8月

2011年7月

2011年7月

2011年8月

ライター本間の 源流体験教室体験記

2018年8月参加

ライター… 本間 啓子（ほんま けいこ）

東京でコピーライターとして16年勤め、出産を機に退職。現在はフリーランスのライターとして山梨県内で活動中。

■源流体験教室に参加

百聞は一見に如かずということで夏休みに私は息子と息子のお友達を誘って源流体験教室に参加させていただきました。

当日は早起きをして車で小菅村へ。市街から外れ清々しい山道ドライブを愉しみながら目的地へ近づくと8月なのにエアコンが要らないくらいに涼しく、窓を開けて走っていると針葉樹のとても良い香りに癒されました。道の両側には美しく整ったスギ・ヒノキの林が。これが中村所長から伺っていた間伐された森なんだと思いながら目的地へ急ぎました。

到着したのは集合場所に指定された廃校になった小学校を利用した源流大学。直ぐに水着とラッシュガードに着替えて、かつて教室だった部屋で、今日の体験者は私たちを含め大人4名と子ども3名の合計7名、ガイドを担当してくださる鈴木さんから教室で一緒に注意事項など説明を受けました。

川歩き用の靴に履き替え、鈴木さんの運転するワゴン車で出発です。小菅村を抜け源流の森へは20分程。車を止めるとライフジャケットとヘルメットを装備し、準備体操をして、出発に備えました。

■いよいよ源流の森へ

森に入るといよいよ源流へ向かいます。動物の足跡も残る道は、ほぼ坂道。転ばないように気を付けながら一列に並んで進みました。先頭に鈴木さん、最後尾には福本さんがしっかりサポートしてくれています。

最初に辿り着いたのは浅い流れの場所で、そこで初めて水に足を浸すと、その冷たさに驚く。水温は真夏なのに16℃。川の歩き方のコツを教わりながら

ジャブジャブと川を登っていくと次第に水深が深くなりはじめます。途中、川に流れ込む湧き水を手ですくって飲むと大人も子どもも口々に「おいしい～」と。とてもまろやかで優しい口当たりの水に感動しました。遭遇する小魚やカエルやクワガタ、カブトムシなどの生き物を観察しながら"淵"や"瀬"など川の名称や成り立ちについての話も聞きました。

さらに進むと、いよいよ水の流れも強く水深は人人の腰程に。ロープを使って岸を超え流れに足を取られたり、押し流されそうになりながらも今日の目的地の滝に到着。全員が水に飛び込み源流を楽しみました。

■源流で感じた水と森と流れの大切さ

帰り道、川の流れる音を聞きながら渓谷を歩くと、普段デスクワークでガチガチになった心も体もほぐされて軽くなり心地よい疲れを感じていました。

出口に近い落ち葉が積もった場所で鈴木さんから「森の木々から落ちた葉が積もって、こんなにフカフカになっているんです。この枯葉が土になるには100年にたった1cmずつなんです。」というお話を聞きました。そして今日一日、一つも「ゴミを見ていない事にも気づきました。最近はどんな森に行ってもペットボトルやビニールなどのゴミが散乱していてとても残念な気持ちになっていたのですが小菅の森ではスタッフの皆さんの森を守る強い想いと努力を感じました。環境というは、その場所だけではなく全てが繋がっていて、こんなにも美しく清らかな上流の流れが壊れてしまえば中流、下流、そして海までも悪くなってしまう。とても大切だけど忘れてしまいがちな「水」や「川」そして「つながり」を体で感じることが出来た一日でした。

源流大学に戻り「ありがとございました。また来たいです。」とお礼を言ってお別れした後は、もちろん小菅村で温泉に入って冷えた体を温め、名物のお蕎麦を食べて、お土産には地元で採れた野菜やコンニャクも購入。帰りの車中では子どもたちは爆睡。親子で夏休みの思い出に残る大満足の一日となりました。

実は、この日は偶然にもTVの取材も同行。冷たい水に浸かりながら、インタビューも含めて、たくさん撮影されていましたが5分ほどの番組に編集されていて映像制作の大変さも感じました。後日、動画もいただいて良い記念になりました。

「源流体験教室」参加団体記録（2001年～2008年）

（ ）内は参加人数

2001年

- 川崎水辺の楽校（42）
- 昭島エコキッズ（14）

2002年

- 県立ろう学校
- 小菅小5年生
- 川崎水辺の楽校
- 瑞穂町教育委員会
- 稲城市青少年委員会
- 三鷹市教育委員会
- 調布市児童館
- 日野市ふるさと博物館
- 稲城市青少年地区委員会
- 多摩市諏訪小学校
- 大田区多摩川探検隊
- 昭島市成蹊小学校

2003年

- 川崎市宮内中学校
- 福生市水辺の楽校
- 東都生協
- 川崎水辺の楽校
- 狛江水辺の楽校（51）
- 稲城市
- 三鷹市
- 八王子市
- 世田谷区
- 小平市
- 大田区
- 京浜河川事務所

2004年

- 黒田児童館
- 川崎水辺の楽校
- 狛江市岩戸児童センター
- 三鷹市社会教育課
- とどろき水辺の楽校
- 狛江水辺の楽校
- 山梨県立ろう学校
- 中野区子ども家庭部
- 調布市児童館サマーキャンプ瑞穂町教育委員会
- 世たがやアドベンチャークラブ
- 稲城市向陽台育成会
- 稲城第6小学校
- 中野養護学校
- 大田区矢口小学校
- ボーイスカウト昭島

●世田谷区城山小学校

2005

●稲城市向陽台育成会
●川崎水辺の楽校
●狛江市岩戸児童center
●世田谷アドベンチャークラブ
●とどろき水辺の楽校
●稲城第六小学校
●三鷹市社会教育会館
●川崎市宮内中学校
●墨田児童会館
●立川わくわく青少年委員会
●小平ボーイスカウト第5団
●調布市児童館ウルトラキャンプ
●東京都小中学校環境教育研究会
●世田谷区子ども夢プロジェクト
●大田区矢口小学校
●港区青山地区委員会
●港区港陽地区委員会

2006年

●山梨県ろう学校
●稲城市向陽台育成会
●立川環境市民の会
●普通学級で障害を受け持つ担任と保護者の会
●とどろき水辺の楽校
●かわさき水辺の楽校
●三鷹市社会教育会館
●狛江市岩戸児童センター
●狛江水辺の楽校
●川崎市宮内中学校
●多摩リバーコミュニティー
●港区青山地区委員会
●稲城市教育委員会
●福生水辺の楽校
●大田区矢口小学校
●ピース・キッズ・サッカースタッフ研修
●多摩川流域協議会
●小菅小4年生

2007年

●立川誠心会（24）
●福生水辺の楽校（32）
●松中小学校職員研修（22）
●狛江水辺の楽校（38）
●狛江市少年消防団（34）
●川崎水辺の楽校（60）
●とどろき水辺の楽校（72）

●ころころ児童館（8）
●三鷹市社会教育会館（25）
●川崎市宮内中学校（33）
●武蔵野市水道部（44）
●調布市環境政策課（37）
●調布市ウルトラキャンプ（143）
●港区青山地区委員会（55）
●ピース・キッズ・サッカー（25）
●世田谷アドベンチャークラブ（22）
●矢口小学校お父さんクラブ（31）
●東京農業大学実習（9）
●小菅小学校4年生（6）

2008年

●啓明学園初等部（38）
●とどろき水辺の楽校（91）
●成長の家
●三鷹市社会教育会館
●調布市環境政策課
●多摩リバーコミュニティー
●立川水辺の楽校（45）
●上野原野球チーム
●青梅青年会議所（26）
●川崎市宮内中学校
●武蔵野市水道部（42）
●狛江水辺の楽校
●大田区矢口小学校
●港区港南地区委員会
●港区青山地区委員会
●世田谷アドベンチャークラブ
●狛江多摩川探検隊
●多摩川流域協議会
●川崎水辺の楽校
●小菅小学校
●稲城市向陽台育成会

	団体数	合計人数
2009年	24	858
2010年	24	1027
2011年	28	933
2012年	41	967
2013年	28	878
2014年	24	739
2015年	21	569
2016年	23	608
2017年	22	516
2018年	21	453
2019年	22	405

4つの主な事業

緑のボランティア・森林再生プロジェクト

緑のボランティア・森林再生プロジェクト

多摩川源流域に広がる民有林は戦後の拡大造林によりスギやヒノキが植林されましたが外材の大量輸入による木材価格の低迷で間伐などの手入れが行き届かず人工林の荒廃が進んでいます。

小菅村と源流研究所はこうした現状を改善しようと、多摩川流域市民・東京農業大学・森林組合・小菅村・当研究所による「森林再生プロジェクト」を開始。日本財団の助成を受けて、まず村内の民有林を調査し、東京農大の宮林教授らの専門家による指導で「森林診断書」が作成されました。その処方箋に基づいて森林の機能向上や適正な維持管理を目的に、健全な森づくりの第一歩を踏み出しました。

■ 2003年度　森林再生プロジェクト開始

2003年の春、「自然を愛する市民の皆さん、力を合わせて民有林の間伐や除伐に汗をかき、あなたの手で源流の森に新しい生命と希望の光を育てませんか」と多摩川源流緑のボランティアへの参加を呼びかけました。

すると私たちの予想をはるかに超える市民が応募してきました。ボランティア隊による間伐などの森林整備は第一回目が2003年5月10・11日、第二回目が6月21・22日、第三回目が9月20・21日、第四回目が10月18・19日、第五回目が11月8・9日、第六回目が12月6・7日のいずれも土曜・日曜の二日の日程で年六回を予定して募集が行われました。

第一回目の初日の開会式で東京農業大学の宮林教授は「森林は木材生産の機能、水源涵養の機能、国土保全の役割、環境教育・保健文化などの機能など国民生活に欠かせない公益的な機能を備えています。いわば源流域の森林は流域社会全体の財産に等しいのです。そこで、その財産を流域全体で守り育てようというのが今回の取り組みです。具体的な実施にあたっては森林の現状を正確に判断し、どんな手当てが必要なのかの処方箋を作り、森林整備の将来的な目標を明確にして作業にあたりたい」とこの事業の意義を解説しました。さらに菅原教授が森林調査の進み具合をわかりやすく説明しました。

午後からは今川森林団地に出向いて地元森林組合のインストラクターの指

導で間伐による森林整備を実施。森林組合からは7名がスタッフとして参加。班編成をしてグループごとに丁寧に間伐作業の手順や作業方法をボランティアの方々に説明しました。間伐の際、木が倒れて怪我をする場合が多いので周囲に大きな声をかけて知らせることを徹底。森林組合のインストラクターの懇切丁寧な指導に参加者からは感動と感謝の声が上がりました。

間伐が進むと木々の間から明るい光が差し込み、森林が健全な姿を取り戻している様子が手に取るようにわかりボランティアの顔も思わず明るくなりました。

ボランティアの声

光が森に差し込み森が元気になった

森林再生の取り組みの中で生まれた連帯感と信頼感。この若い力が日本の新しい森を作る原動力となる…そんな予感がする当時の参加者のアンケートを紹介します。

■いい森に育っていけよ!

第1回目に参加できたことは、すごく嬉しいことでした。スタッフの皆さんや大学の先生の話を聞いているうちに自分は凄いことをしてるんだな〜という気がしてきてワクワクしました。これから10年かけてプロジェクトをやっていき100年後に200年後の小菅の森がどうなっていくかすごく楽しみです。いい森に育っていけよ!という感じです。大学一年のうちから、こういう機会に現場を見て間伐の作業ができ、とても良い経験になりました。これから10年間このプロジェクトに関わっていきたいです。

■森に光が入り感動

間伐によって森に光が入ることで、だいぶ外観が良くなったように感じて感動しました。素人の私にも親切に森林組合の方々が作業の方法などを分かりやすく教えてくださって嬉しかったです。これからも小菅村に来て良い空気と

美味しいご飯をいただいて、さらに山をきれいにすることに少しでも役に立てたら幸せです。今回は本当に楽しませていただいています。ありがとうございます。

■初めてづくしでした

木を切るのも初めてでしたし間伐作業の意味についても身をもって体験することで自然と人間の関わりを考えさせられます。自然をそのまま残す事をしなかった人間が、その後の管理を怠ってきたことで大きな代償を受けることになったのですね。今回の体験を生かし自分の生活を省みて今の日本がより良い状態になるように小さな努力をしていきたいと思います。中村所長、農人の先生方、役場の方々の細かい心遣いや、きちっと計画されたスケジュール、脱帽です。お忙しい中ご苦労様でした。そして、これからも目標に向かって前進していってください。

■これからが楽しみ

とても良い経験をさせてもらいました。これから森がどうなっていくのか楽しみです。10年間で60回、できるだけ多く参加していきたいと思っています。木を切った後に森を見渡すと全体がとても明るくなっていて、とても気持ちがよかったです。森を手入れしていく大切さがよくわかりました。

■心暖かくなった

間伐なんてほとんど体験がなくて戸惑いも多く心配でしたが先生方が丁寧に分かりやすく教えてくださって、おかげで楽しく活動することができました。作業は体力勝負であることを実感し疲れました。でも、その後の美味しいご飯や語らいもあって疲れたというよりも楽しかったという印象の方が大きかったです。小菅村の方々も森林組合の方々も良い方ばかりで心温かくなりました。感謝の気持ちでいっぱいです。何度も参加したいです。

■これからも続けて参加したい

紹介され、ほとんど知識を持たず来てしまったのですが、そんなド素人にも、こんな大掛かりなことが出来るのだということがわかり良かったです。記

急すべき第1回に参加でき、これから10年間続くと聞き、ぜひ私も続けて参加させていただきたいです。そして他の関心のある人にも紹介したいと思います。もう少し参加人数を増やして欲しいです。

伐採の講習

伐採後の処理

■ 信頼広げる緑のボランティアの活動

2003年度の重点課題として取り組んだ森林再生プロジェクト事業が第1回目から6回目まで合計233名ものボランティアの参加で大きな成果を残して無事終了しました。今回の森林再生プロジェクトは東京農業大学と地元の森林組合の指導と協力を得ていることが大きな特色です。

東京農業大学の宮林教授、造林研究室の菅原先生から「森林診断」の内容と進め方の指導を頂き、人工林の現状調査が開始されました。調査項目は樹木の種類、樹齢、立木本数、立木密度、材積、土壌、傾斜、現在の管理状況などです。まず村内の人工林を視察してモデル地を設定。円形標準地法による立木本数と立木密度の調査が実施されました。こうした基礎的な調査を進め、所有者の意向を踏まえて森林の現状を診断し、森林が望ましい形で整備される方法が採用されました。「森林診断」とその処方箋に基づく森林再生事業はまだ開始されたばかりですが、その実績を積み重ねることにより、この事業に対する理解と協力の輪が少しずつ広がっていくと確信しました。

実は今回、募集した緑のボランティア事業は大きな不安要因を抱えていました。これはボランティアの参加に交通費と参加費の負担をお願いしたことです。例えば新宿から奥多摩町まで交通費が往復で2,100円かかります。そして2日間、間伐作業に取り組み参加費を4,000円（2004年から6,000円）支払ってもらうと合計6,000円。この負担が参加者の条件のハードルを越えて緑のボランティア活動に参加してくれる流域の市民がどれくらいいるものか予想がつきませんでした。

しかし嬉しいことに朝日新聞都民版が5月8日付で「山梨県小菅村、緑のボランティアを募集。多摩川の水源を守ろう」と森林再生事業の内容を紹介してくれました。すると掲載当日からボランティアの申し込みが次から次へと舞い込み6月末には17月までの定員がほぼ埋まるという大きな反響がありました。

参加ボランティアの中には6回すべてに参加する方が出るなどリピーターも多くいました。森や村を良くするために献身的に活動するボランティアに地元の信頼も集まりました。今、地球環境への市民の関心は高く、より良い環境を次代に残していきたいと自らも環境ボランティアに参加する動きが強

まっています。今年の森林再生プロジェクトに取り組み、良識のある市民が確実に増加していることを実感しました。

ボランティアの声

健康で元気な森を育てるために

多摩川流域から「緑のボランティア」に参加していただいた皆さん、本当にご苦労様でした。特に学生諸君の積極的な参加は将来に対する希望と確信を与えてくれました。

■達成感を感じた

全部ではありませんが一年間、参加してきた達成感を感じています。今回で今年のプロジェクトも最後、今まで何度か顔を合わせていた方とも暫く会えなくなると思うと寂しいです。暗い森林に陽の射す光景を忘れません。この事業に参加するためにバイトして来ていますが4,000円+交通費を出しても来る価値は大いにあると思います。

■この村が大好きです

小菅村にお世話になりはじめて7ヶ月。本当にこの村が大好きです。ボランティアに参加して間伐が終わった後に上を見上げると大きく空が見えるようになって人海戦術の凄さを知りました。木に登る望月さんも素敵です。皆さんとお酒を飲んで話したり、本当に楽しく過ごしました。今度はチェーンソーを使ってみたいです。

■とてもやりがいを感じた

今回は間伐の選定を自分でやり、それを選んだ理由や伐倒方向を指導者の方に説明するという形だったので、とてもやりがいを感じ深く理解することができました。10年後が楽しみです。

■意外にも飽きなかった

ひたすら間伐というこのプロジェクトに参加しましたが、組合の方も楽しくて意外にも飽きずにやることが出来ました。何より自分が何かしたい、村をもっと良くしたいという一人一人の強い気持ちが清々しく終結していたのが素晴らしかったです。色々な人と垣根なく知り合いになれ、木のこと、森のこと、人のことを学べました。ありがとうございました。夜の時間は完全に解放!の時を決めて欲しいです。

■感謝の気持ちです

ボランティア活動は種を蒔く人、水をやる人、その花を愛でる人、それぞれに役割があるもの。世代を超えた人々の小菅の大自然を愛する心に触れ、思い出多き楽しい日々を過ごすことが出来て感謝の気持ちでいっぱいです。小菅村役場森林再生プロジェクト事業に乾杯!ありがとうございました。

■ぜひ来年も参加したい

この素晴らしいボランティアに5回も参加させていただき誠にありがとうございます。今回も様々な年代との交流や森林組合の方との交流と良い経験をさせてもらいました。ぜひ来年も参加したいと思います。今日は間伐の意義を再確認する場をもうけたことは良いことだと思いました。

伐採

伐採作業

2003年度 森林再生事業の施業指針

東京農業大学　菅原　泉

今年度の調査地は村内5か所に設定したが実際に間伐を行った所は4ヵ所であった。対象地は造林木にとって比較的肥沃な立地条件にあり、かつ間伐手遅れ林分なため特に杉林は胸高直径に対する樹高の割合が高く、ひょろ長い傾向があった。

このような林分を優良な木材資源となるように間伐を行うことになったが、実施指針の密度管理図から導き出した間伐率そのまま適用しては雪害の危険性が高いため、間伐率は低めに設定した。しかし数年後には対象地を何回か見直しながら理想の成立本数に近づけたいと考えている。

今後、適地適木の研究を進め雪害や風害に耐える林木に仕立てるとともに間伐を通して林床に光を入れて、林床植成を育成・維持し健全な生態系の回復・循環を図りたい。

■ 2004年度 森林再生プロジェクトスタート（2004年5月）

2003年度に大きな反響を呼んだ森林再生プロジェクト事業が2004年度も5月15日から16日にかけてスタートしました。第1回森林再生プロジェクト事業では東京農業大学の専門家が作成した「森林診断白書」を基に地元の北都留森林組合や林業家に指導を依頼し、緑のボランティア39名が協力して間伐作業に取り組みました。

「森林再生プロジェクト」事業とは源流域の人工林の再生を目指し東京農業大学の専門家が作成した「森林診断白書」に基づき緑のボランティアが地元の森林組合や林業家の指導により間伐などの作業を行う事業です。昨年度は小菅村、多摩川源流研究所、北都留森林組合、東京農業大学が多摩川流域から募集した緑のボランティア（のべ233名）と連携して人工林再生へ向けて開始されました。

2004年の第1回目は緑のボランティア39名が参加し、5月15日に東京農業大学・造林学研究室の菅原助教授から間伐の必要性について講義を受けていただきました。その後、2003年12月にも作業を行った小菅村内の民有林の間伐作業を実施。作業では緑のボランティアが八班に分かれ班毎に指導員からアドバイスをもらい間伐する木の選定をしていきました。間伐作業で発生する"懸かり木"には全員が協力してロープを使って引き倒し、枝を落とし、利用しやすいように玉切りを行い集材しました。

2日目の16日は雨となったため間伐作業は中止となり急遽、林業廃棄物処理施設を見学。木の利用方法などの話や木材を有効利用するために導入されたチッパーなどの機械を見学した後、北都留森林組合の事業所で木工作業を行いました。間伐材を利用したネームプレートやウツギなどを使った昔ながらのおもちゃの製作を行いました。

■「森林再生プロジェクト」事業に新たな展開（2004年7月）

事業開始から一年が経過した「森林再生プロジェクト」事業。今年度の第2回目が2004年6月19日～20日に行われました。多摩川流域から46名の緑のボランティアが参加し、広葉樹林の除間伐を行いました。また7月3日～4日に行われた第3回目には36名が参加し、当事業では初めての試みとなる下草刈りを行いました。

■劣勢木の伐木と下草刈り

管理が不十分な針葉樹林の人工林の荒廃を食い止めるために始まった「森林再生プロジェクト」ですが夏は樹木内で水分移動が活発であるため伐倒木が立木に当たると、その傷から病気になりやすく木材としての価値に大きな影響を与えるため間伐は行いません。そのため広葉樹林の除間伐と植樹を育成するための下草刈りを実施しました。

第2回の作業は優先樹種ミズナラの発芽と種子更新を考慮し、森林内の照度を上げるための劣勢木の伐木です。

今回は針葉樹林と異なり様々な樹種や樹形の木を切りました。小径木をたくさん切る必要があるため参加者ひとりひとりが、どの木をどうやって倒すかを考えなければいけません。その体験が森の再生を行っているという充実感に結びつきました。作業を進めるに従って増えてくる木漏れ日が清々しく感じられました。

第3回は林業作業の中で一番辛いと言われている下草刈りを行いました。下草刈りとは植栽した苗木の際生育を妨げる雑草木を刈り払う作業のことで雑草木が生育する夏の作業です。今回は初日に桜の植栽地、2日目にはヒノキの植栽地の下草刈りを行いました。両日ともに晴天で炎天下での作業。参加者のほとんどが下草刈りに使われている大鎌を使うのは初めての経験で、指導員からは安全面を考慮し下から上から進んでいくよう指導を受け、慣れない斜面の作業に奮闘しました。鎌は使っているうちに切れ味が落ちてくるので適時研ぐ必要があります。休憩時間には大鎌を研ぐ指導員の周りに参加者が集まり研ぎ方を見つめていました。作業を疲れず安全に行うために道具の手入れは欠かせないということを実感しました。

作業の内容、辛さ、楽しさ、どれをとっても初めてづくしの内容でしたが森林再生とは森づくりであると改めて実感。森林を育てるためには様々な作業が必要であることを参加者ひとりひとりが体験することができました。

玉切り作業

玉切りとは…立木の伐倒後、枝払いをし、適当な長さにカットし、素材丸太にすることです。切り分けた丸太のことを「玉」と呼ぶため、「玉切り」と呼びます。

■ 元気な源流を創る小菅村の取組 (2004年11月)

2004年11月18日に小菅村役場の二階会議室で源流再生プロジェクト説明会が開催されました。説明会には環境省自然環境計画課から佐藤課長補佐(当時)、林野庁計画課からは河野森林計画官が出席。国土施策創発調査の各省庁の取り組みを解説しました。参加した90名を超える村民からは熱心に質問が出るなど盛り上がりを見せました。

■ 森林再生モデル林整備事業を開始 (2005年2月)

源流域に広がるスギやヒノキの人工林の荒廃が著しく防災上からも放置できない現状にあります。小菅村と源流研究所は一昨年から日本財団の支援を受けて森林再生プロジェクト事業を実施。今回で13回を数える緑のボランティアによる森林再生事業では環境省、国土交通省、林野庁からの支援を受け「源流再生・流域単位の国土の保全と管理に関する国土創発調査」の一環として、地域のプロによる森林再生モデル林整備事業の取り組みを行いました。

■森林再生プロジェクト・広がる取り組みの輪

2005年2月26日～27日の2日間かけて小菅村の今川森林団地で森林再生モデル林形成事業が実施されボランティアや研究生の指導者など79名が参加し枝打ちや間伐に取り組みました。当日は午前11時から小菅村役場で事業説明会を開催。開会時、小菅村の廣瀬文夫村長は「小菅村には昭和30年から40年にかけて植えられたスギやヒノキの林が広がっていますが、材木の価格が安すぎて手をかける人がいなくなり山が荒れています。私が子供の頃は親と一緒に山仕事をしましたが今では山に入る子供たちはいません。上流域と下流域の交流を進めて源流の森林を守りましょう。枝打ち作業で怪我のないよう頑張ってください。」と挨拶しました。

事業説明に立った源流研究所の中村所長は「この森林再生モデル林形成事業は民有地の人工林を健全な森に育てることによって流域全体の環境保全に貢献するのが目的です。ボランティアでもプロ並みの森林整備が可能であるこ

とを証明し、その成果を全国に発信しましょう。」と事業の意義を語りました。

続いて東京農業大学の菅原泉助教授は「枝打ちは無節で価値の高い木材を育成し林の中の見通しを良くし、下木の成長を促進するものです。また風通しを良くすることで病害虫の軽減にも効果があるなど優良材を生産して木材の価値を高める保育の手段です」と枝打ちの目的をわかりやすく講義し参加者に好評でした。

午後からは今川森林団地に出向いて森林組合のインストラクターの指導を受けながら枝打ちを開始。森林組合の木下さんが梯子や木登り機を利用してヒノキに登り枝打ちの実演を行いました。参加者の前で7mもの高さに簡単に駆け登り、またたくまに枝打ちを終了する姿に参加者からは感嘆の声が上がりました。その後、各班に分かれたボランティアは梯子や木登り機を使って実際に枝打ちを開始。2日間で見違えるように明るくなったヒノキ林に明るい笑い声が響いていました。今回のボランティアの中には新潟県から駆けつけてくれた方もいて、この取り組みの輪が徐々に広がりを見せていることを教えてくれました。

■ 3年目に入った森林再生プロジェクト（2005年5月）

■森林診断白書作成と森林整備事業

5月28日の午前11時、小菅村役場には森林再生プロジェクトに参加するため多摩川流域の緑のボランティアが続々集結。年度初めの事業説明では東京農業大学の宮林茂幸教授と菅原泉助教授が登壇。日本の森林の現状や森林整備事業の意味、森林診断の意義とその内容、間伐の必要性、今後の森林整備の状況などについて分かりやすく解説しました。

宮林教授は「小菅村の森林再生事業の実施にあたって特に重視したことは、民有林の実態調査と今後の森林整備の目的を明確にすることでした。そのため専門家による森林診断白書を作成し実際のスギ・ヒノキの現状を科学的に把握する調査活動に取り組んできました。」と小菅村における森林再生事業の特徴に触れました。

菅原助教授は森林診断白書について「まず具体的には人工林内の数ヶ所を

調査地に設定します。さらに5メートルの棒を使って中心点を軸に一回転し、棒が描く円内に入る立木を全て測定する円形標準値方を実施しました。これにより実際の1ヘクタールあたりの立木本数を確認。これに基づいて今後の作業内容を示す処方箋を作成しました。」と説明。また「今後、村の森林を生産林・経済林として育てていくのか、将来的には環境林・環境材として管理していくのかなど民有林毎の実態と問題点を洗い出し、ゾーニングの導入などを検討していきました。こうした森林診断に基づく森林再生プロジェクト事業は全国的にも珍しく有意義なものです」と述べました。

■参加と連携と共同

続いて挨拶に立った小菅村の青柳論源流振興課長は「多摩川源流一帯は東京都の水源地帯です。小菅村は水源の村として美味しい水を作り、綺麗な水を下流域に届けたいと考えています。人口の減少が続き1,000人を切る状態でありますが交流人口を増やして元気な源流の村を作りたい」と参加者を歓迎しました。

源流研究所の中村所長は「今、山村に住む人々だけでは森林は守りきれません。多摩川源流域に広がる森や水は流域社会共有の財産です。この共有財産を流域全体が共同で守る仕組みづくり・組織づくりに努力しています。市民・森林組合・専門家・自治体による参加と連携と共同こそが森林再生プロジェクト推進の鍵であるのです」と強調しました。

午後からは森林組合、林業家の指導を受けながらヒノキ林の間伐に取り組んだ参加者は「一本一本間伐が進むごとに森が明るさを取り戻していきました。自分の活動が森に生かされているということを身体で感じました。いい汗をかきました。」と笑顔を見せていました。

■「森林再生プロジェクト」事業が大きく前進（2005年11月）

源流域に広がる民有林の多くは木材価格の低迷により間伐などの手入れが行き届かず荒廃が進んでいます。この現状を打開しようと開始された「森林再生プロジェクト」事業が2005年度も大きく前進しました。2004年5月の第7回目の間伐作業から11月の第6回目の間伐作業までに流域から募集した220名が緑のボランティアとして参加。チェーンソー講習会の実施とステップアップ教室も開催されるなど活気にあふれた森林事業が展開されました。

■愛情をかけた間伐を

11月13日～14日に行われた第6回目の間伐作業は小菅の湯の近くの大久保森林団地と今川森林団地の7か所で実施されました。間伐にあたって東京農業大学の菅原助教授から「この間伐にあたって森林診断を行ってきましたが1ヘクタールに2,200本近いスギが植えられています。本来ならば1,600本まで間伐が完了すべき森林です。今この森は陽が入らないので土が弱り保水力も落ちています。愛情をかけて取り組めば必ず健全な森になります。雪折れの心配もあるので時間をかけてじっくり間伐しましょう。」との解説がされました。

■林業とのかかわりをより深く

チェーンソーによるステップアップ教室は今川森林団地を利用して木下景利さんの指導で行われました。40年生の大きなヒノキにチェーンソーを使って実際に間伐しますが、どの部分を、どの程度切り込むのか、どの方向に倒木するのかなどの細かい指導を受けながら作業が行われました。40年生にもなると地面に斬り落とされた時の衝撃は大きく地面が揺れる程。ケガをすると取り返しのつかない事態を招くので参加者は木下さんの指導に従いながら真剣に取り組んでいました。間伐の技術を向上させることにより一層高度な間伐作業に従事した参加者は「これからの林業に、より深く関わりたい。そのためには自らを磨き責任ある緑のボランティアになりたい」と森林再生事業への意欲的な参加を語っていました。

■木漏れ日が注ぐ森へ

大久保森林団地は長年放置され手入れが行き届かなかったため陽が射さず下草の生えない薄暗い森林になっています。緑のボランティアは間伐インストラクターから間伐方法の講習を受けた後、のこぎりを使ってスギやヒノキを間伐しました。長年放置された人工林では樹間の閉塞が進み、のこぎりで幹を断り落としても枝が他の木に引っかかり、なかなか倒れず悪戦苦闘。参加者は「間伐が進むと木々の間から光が注いでスギやヒノキが元気を取り戻しているようで心が晴れ晴れとします」と明るい声で感想を語りました。

大久保森林団地は小菅の湯の近くで源流景観を保つ上からも大変貴重な場所となっています。小菅村の青柳源流振興課長(当時)は「将来的には小菅の湯周辺は広葉樹と針葉樹の混合林を目指し景観的にも流域の市民に楽しんでいただけるようにしたいです」と今後の抱負を語りました。

■ 20回を迎えた「森林再生プロジェクト」(2005年12月)

12月3日～4日に行われた「森林再生プロジェクト」は開始から20回目の開催となり、これまでに延べ1,658名が参加して村内の18ヘクタールの森林で間伐などの作業を行う大きな事業へと成長しました。

■光の差し込む森林へ

森林再生プロジェクト事業では小菅村内の今川と中組周辺の森を中心に間伐などの作業を行ってきました。特に今川ではモデル林の間伐と枝打ちを行うことで、落とした枝が表土の流出を抑え、枯れた後は林床になり植物を育てます。人工林でも適正な管理を行えば土砂の流出を少なくできることが実証されました。また、木材価格の低迷や新建材などの導入により国産材の価格は低迷していますが、できる限り間伐した木を搬出・利用する取り組みも始まりました。

この事業は東京農業大学の専門家や地元森林組合や林業家の協力を得て実施されてきました。民有林という所有者の財産を舞台とする活動のため、東京農業大学に依頼し円形標準値方により適正な間伐密度を算出して、林業のプ

口による指導を行ってきました。

源流域の住民にとって外から来るボランティアは完全に仕事を任せるには不安の残る存在でしたが、この事業の20回の取り組みを通してボランティアに対しての信頼が得られ事業実施場所の提供も増加しました。また、もう一つの大きな成果として、参加したボランティア同士の交流があります。年齢や職業も異なる人々が間伐などの同じ作業することを契機に交流会では、それぞれの立場から意見を述べ互いに学び合う姿が見られました。事業終了後のアンケートに「いろいろな方と知り合えてよかった」とあるように特に学生の参加者には、このような異世代間や異業種間の交流は貴重な体験となっています。日本全国に手入れの行き届かない人工林は1,000万ヘクタール以上あると言われています。この事業で全ての森の間伐を行うことはできませんが、問題の解決に向け森林に対しての理解と共感を広げ陽の光の射す森林を少しでも増やしていくことが大事だと考えます。

倒伐作業

伐採後の木の集積

■ 緑のボランティアによる間伐実施（2010年1月）

■流域と一体となっていい森、いい川づくり

2009年度、小菅村・多摩川源流研究所は9月から11月にかけての3回、源流大学と北都留森林組合と協働で緑のボランティアによる間伐体験を実施しました。流域の市民と一緒にいい森、いい水、いい川を育てようとの呼びかけに大勢の流域の市民と源流大学の学生が参加しました。参加者からは「緑のボランティア復活おめでとう！案内書をもらった時、本当にうれしくなりました。また小菅の故郷に帰れる…ワクワクした気持ちになりました。」など緑のボランティアを歓迎する声が多く寄せられました。

緑のボランティアに寄せられた声

●新人スタッフの方、発足当初の趣旨（情熱）を充分受け継いで役割を果たしていますね。若き学生さんが初心者ならではの脳細胞に、菅原先生の講義を吸い取り紙のように吸収しています。目をキラキラ輝かせて今後の成長に期待したいです。

●間伐の重要性を再認識し、山を健康に保つのは自分の健康を保つのと全く同じことだと感じました。平地の間伐と斜面では傾度が全く違いました。私たちの生命と密接に関わっている源流の大自然に新しい希望の光を当て緑の森林を育てる緑のボランティア隊に参加した意義に乾杯！！

●久しぶりに緑のボランティアに参加して楽しかったです。少しでも山の再生が出来たと思います。伐採する前と伐採した後の林の明るさの違いが印象に残っています。

●現場での講師、スタッフの説明がわかりやすかったです。本数ではなくゆっくり落ち着いてがgood

●緑のボランティア再開に感謝します。上流と下流の交流、老人と若者の交流、都市と山村との交流、多くの交流が、村や都市の人々を活性化させます。ぜひ、このボランティアを続けてください。前回の間伐で森の樹木が大きく育っていました。今回の間伐でさらに素晴らしい森になることを期待します。

●年齢に応じて体力が衰えていることを痛感。手切りなどノコギリの使い方など楽しく実習できました。ボランティアというより実習という意識でした。若者との共同作業、道の作業の新鮮さを感じました。チェーンソーの使用も適宜に使ってグーでした。研修として学べればなおありがたいです。

●農大の若い学生さんが多かったので今後の日本もまだまだいけると思いました。若い女性が各班にいたのが良かった。

●緑のボランティア再開に感謝します。老若男女と一緒の作業はパワーをもらい元気になります。良い空気の下での作業、いつもながら良い場を与えていただきありがとうございます。4年ぶりの伐採、楽しく過ごしました。

●里山の保全には携わっておりますが日本の山、森、林を守るための手が欲しいですね。年代物のノコギリを曳かせてもらって、私を含め、特に学生は見たこともないノコギリ曳きは良い経験だったと思います。

●数をこなすことが体力的にしんどいと思いました。作業終了後、作業場所が整理された姿が良かったです。

●緑のボランティア復活おめでとう！案内書をもらった時、本当にうれしくなりました。小菅の故郷に帰れるワクワクした気持ちになりました。懐かしい方にもお会いでき話も弾みました。

●感じたことは森の手入れの大切さ、学生や地元との交流の場、エコロジー。地域活性化につながる。真面目な学生に元気づけられました。

●黒川課長の言う、体験ボランティアから真のボランティア活動へ、緑のボランティアを発展させてほしいです。

●テコの応用で立木を倒すのを初めて見ました。

●初めて間伐を体験して木を切るのがかなり大変でした。「引くときに力を入れる」ということはわかっていても動かなくなってしまって押す時にも力が入ってしまったりと色々と難しかったです。運び出すのも重い木が多少あったり、倒す時にロープを引っ張ることもあまりできなかったが、それでも、とても楽しい体験でした。一般の人と協力して木を倒した時なかなか切れなかったし引っかかったりもしましたが、それでも倒せたのが嬉しかったです。

●チェーンソーの目立ての技術の素晴らしさ！ 左右バランスが取れていて、良く切れる。

●若い学生諸君は譲り合いの心があってチームワークが取れた。体験することで肌身に染み実感が湧く。「楽しいもの」と今なお体全体で示してくれる木下さん、川村さん（牛汪現役）の存在は大きいです。

第7回
全国源流シンポジウム
in 小菅村
(2006年
10月28・29日)

第8回
全国源流シンポジウム
in 宮崎県五ヶ瀬町
(2007年10月27日)

第10回
全国源流シンポジウム
in 奈良県天川村
(2009年
9月12・13日)

4つの主な事業

「全国源流ネットワーク」づくり

「全国源流ネットワーク」づくり

平成13年(2001年)4月8日、山梨県小菅村で多摩川源流研究所が設立され、その記念事業として全国源流シンポジウムが開催されました。翌年5月25日に奈良県川上村で源流を愛する仲間によって「全国源流ネットワーク」が結成されました。全国源流ネットワークは尻別川(北海道)、天竜川(長野)、吉野川(奈良)、旭川(岡山)、江の川(島根)、大野川(大分)、球磨川(熊本)など14河川域で活動する16団体が加盟し、山梨県内からは当研究所と南都留郡道志村の道志川流域住民でつくる「道の会」の2団体が参加し発足しました。

各団体はネットワークの事務局長を務める多摩川源流研究所を中心に連携し、シンポジウム、イベントの開催や各種情報発信などの活動を行ってきました。

源流研究所は、多摩川の流域、また全国の源流にかかわる市民、行政、専門家など幅広い人々との交流を図り、源流域の自然環境の保全や流域の活性化などを目的に源流のネットワークづくりを進めました。

■ 第1回全国源流シンポジウムを小菅村で開催 (2001年)

多摩川源流 [山梨県小菅村]

第1回全国源流シンポジウムは「全国源流自慢〜源流の魅力を語る」をテーマに北海道十勝川水系から帯広市の千葉よう子氏、奈良県吉野川水系から川上村役場(当時)の坂口泰一氏、大分県大野川水系から九州の河童と呼ばれる鳥野敏治氏の3名と多摩川の源流に特別な思いを寄せる田中喜美子氏、三谷益巳氏、源流研究所所長の中村氏の計6名をパネラーとして招待。全国水環境交流会の山道省三 事務局長(当時)をコーディネーターとしてそれぞれが源流への熱い思いとユニークな活動を報告しました。

シンポジウム・サミット（2001年～）

■シンポジウム

- ●第2回全国源流シンポジウム（2001年）…大野川源流［大分県竹田市］
- ●第3回全国源流シンポジウム（2002年）…吉野川源流［奈良県川上村］
- ●第4回全国源流シンポジウム（2003年）…高津川源流［島根県匹見町・六日市町］
- ●第5回全国源流シンポジウム（2004年）…［東京農業大学］
- ●第6回全国源流シンポジウム（2005年）…北上川源流［岩手県盛岡市］
- ●第7回全国源流シンポジウム（2006年）…多摩川源流［山梨県小菅村］
- ●第8回全国源流シンポジウム（2007年）…五ヶ瀬川源流［宮崎県五ヶ瀬町］
- ●第9回全国源流シンポジウム（2008年）…木曽川源流［長野県木祖村］
- ●第10回全国源流シンポジウム（2009年）…熊野川源流［奈良県天川村］

■サミット　※2010年からシンポジウムからサミットと名称変更

- ●第1回源流サミット（2010年）…道志川源流［山梨県道志村］
- ●第2回源流サミット（2011年）…旭川源流［岡山県新庄村］
- ●第3回源流サミット（2012年）…四万十川源流［高知県津野町］
- ●第4回源流サミット（2013年）…利根川源流［群馬県みなかみ町］
- ●第5回源流サミット（2014年）…吉野川源流［奈良県川上村］
- ●第6回源流サミット（2015年）…矢作川源流［長野県根羽村］
- ●第7回源流サミット（2016年）…四万十川源流［愛媛県松野町］
- ●第8回源流サミット（2017年）…東京都［二子玉川］
- ●第9回源流サミット（2018年）…高津川源流［島根県津和野町］

■ 第1回全国源流フォーラムを小菅村で開催 (2003年)

多摩川源流［山梨県小菅村］

第1回 全国源流フォーラム in 小菅村

小菅村と全国源流ネットワークが2003年12月13日、14日、小菅村中央公民館で第1回全国源流フォーラムを開催しました。島根、広島、岡山、奈良、神奈川、東京、埼玉、山梨の各県から170名が参加し、源流の役割や価値と可能性の探求をテーマに熱心に意見交換しました。

主催者を代表して小菅村村長の唐瀬义夫氏が「全国の源流域は過疎化の荒波にさらされているが過去の経済万能の風潮を反省し、人間性豊かな社会の構築に向けて台頭が起こり始めている。この2日間で源流の自然や歴史文化などの価値と魅力、可能性を大いに探求してほしい。」と挨拶しました。

続いて来賓を代表して環境省の佐藤寿延課長補佐からは「全国すべての川には源流がある。源流の良さや価値をこんなに集まって議論することは素晴らしい。来年の全国源流シンポジウムでは源流を多くの皆さんに知らせたい。国の方でもこの源流の価値に対して取り組みをやろうといろいろ相談している。今日は源流の新しい価値を探って帰りたい。」とお話しいただきました。

この後、全国源流ネットワークの中村文明代表がこれまでの各地の源流で

の活動を紹介し、源流フォーラムの趣旨を説明。フォーラムでは東京農業人の宮林茂幸教授がコーディネーターを務め、東京大学の高橋裕名誉教授や哲学者の内山節氏、荒川ネットワークの恵小白合代表、京浜河川事務所の海野脩司所長が源流の役割や価値と可能性の探求をテーマにそれぞれの立場から意見を発表しました。

2日目は山道省三さんをコーディネーターに奈良、島根、岡山、埼玉、神奈川、小笠の各地から活動が紹介され上下流域連携や環境教育で源流の村の活性化策などが話し合われました。

■ 多摩川流域ネットワーク結成（2004年6月）

多摩川流域ネットワーク設立総会

6月28日、川崎市多摩区のせせらぎ館で多摩川に関心を寄せる山梨、東京、神奈川の市民36名が参加して多摩川流域ネットワークが設立されました。多摩川では非常に多くの市民団体が活動し、1998年12月には多摩川流域懇談会が設立され全国に先駆けて河川整備計画が確立されるなど活発な市民活動が展開されてきた歴史と伝統がありますが、源流から河口までの全流域に係る市民が一堂に連携する組織は初めてのこと。多摩川の流域間の協調と友好と信頼の絆を深めるために活動が始まりました。

■ 全国源流の郷協議会設立（2005年11月）

2005年11月、源流の郷づくりと源流資源保全を目指し"全国源流の郷協議会"が設立されました。その第1回幹事会を2006年3月1日に熊野川源流に位置する奈良県吉野郡天川村役場で開催。地元の天川村、宮崎県五ヶ瀬町、山

梨県小菅村・道志村、島根県吉賀町の幹事、そして多摩川源流研究所がオブザーバーとして参加しました。

天川村の西岡参事は「源流の持つ魅力や価値を探求するとともに源流を抱える自治体間の交流・連携を広めながら、源流の郷協議会をもっと大きくしよう」とあいさつ。ついで源流研究所の中村所長が源流をめぐる現状と課題に関する話題提供を行いました。

全国源流の郷協議会設立総会
平成17年11月30日

全国源流の郷協議会設立総会の様子
あいさつをする環境省 黒田大三郎審議官（当時）

全国源流の郷協議会
源流再生政策委員会
（2007年1月18日）

多摩川流域拠点施設交流会
「源流から河口・海までをつなぐ！」
（2010年12月22日）

全国森林作業道研究会
全国源流の郷協議会主催
（2010年9月）

Kawaga Village, Yamanashi Prefecture

多摩川源流研究所
15年間の
歩み

2001－2016

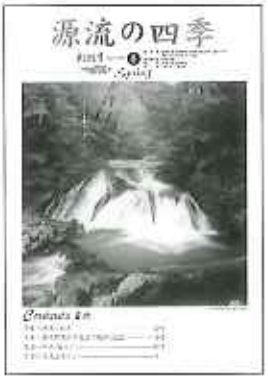
その他の活動紹介

（一部抜粋）

その他の活動紹介（一部抜粋）

「源流の四季」の発行（2001年から2013年まで48号発行）

源流に関するあらゆる情報を流域に発信し、多くの市民に源流に関心を持ってもらうため流域の市町村の協力を得て年4回発行しました。



国土施策創発調査（2004年）

全国の源流地域で健全な森づくりを進め、国土保全を担える町村を育てていくために源流から政策提言を行うことを目標として小菅村・多摩川源流研究所が国からの推薦を受け、全国の源流の調査を開始しました。環境省・国土交通省・林野庁・文化庁などの省庁連携による「源流再生・流域単位の国土の管理と保全」に向けた国土創発調査で流域圏アプローチによる源流の可視化事業や上下流連携推進の新たな施策が示され、全国的な「源流再生プロジェクト」が開始されました。

その主な取り組みは、以下の内容となります。

●**行政組織「全国源流の郷協議会」の組織作り**

河川の源流域に位置する全国各地の8自治体が森林環境保全と参加・連携・協働の源流の郷づくり運動の展開を決意し、平成17年11月設立。（全国源流の郷協議会加盟市町村は2019年11月現在で26自治体）

●**多摩川源流大学構想**

小菅村をフィールドキャンパスとして森林体験、源流農業体験、源流景観体験、源流文化体験など東京農業大学生を対象に体験学習を行い、全

行程に参加した者は東京農業大学の特別カリキュラム1単位を取得できるというもの。

2006年4月、東京農業大学が文部科学省の事業「平成18年度・現代的教育ニーズ取組支援プログラム」へ申請。「多摩川源流域における地域再生と農林環境教育」"多摩川源流大学設置による地域再生プロジェクト"をテーマにした取り組みが認可。

●**森林再生モデル事業**

この事業は2003年から民有林の健全性維持のため小菅村で行われている「緑のボランティア」活動の流れの継続発展の一環として①ボランティアによる間伐モデル林の整備、②森林GISの整備の二つを実施。

●**源流基本法の提言・「源流白書」の発行**

平成24年高知県津野町で開催された第3回全国源流サミットで高橋裕東京大学名誉教授からの「源流白書」作成の提言を受けて、源流白書検討会を立ち上げる。平成25年3月「源流白書」発行。

●**全国源流祭り（全国源流物産展）の開催**

全国源流サミットで同時開催

源流元気再生プロジェクト（2008、2009年度実施）

小菅村と源流研究所は村民とともに山積する課題を前向きに打開しようと内閣府が募集した地方再生に向けた「元気再生事業」に応募し採択された。源流地域の住民と行政、下流域が連携しながら地域資源を活かして展開した多様な取り組みを高く評価され2009年度も継続事業となった。このプロジェクトを推進するにあたって村民の自主的参加による源流元気再生運営委員会（44名）と運営委員会事務局（27名）を組織し住民参加の5つの研究室を設けた。

①木づかい研究室

小菅村の小中学校に木づかいの保健室、狛江、川崎、大田区で木づかいモデル実施。

②産業開発研究室

小菅村の特産品を活かした新商品の開発、小菅弁当の試作など。

③健康づくり研究室

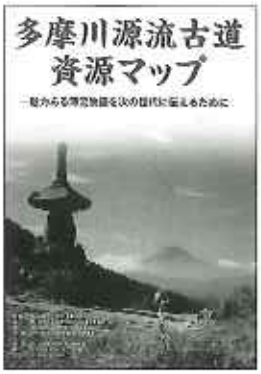
農業と連携した食生活の改善等村民の健康づくりの方向性を探る。

④森林再生研究室

「大橋式路網」の普及のためのDVDソフトや普及用テキストの作成、現地研修会の実施等を通して林業経営の基盤づくり。

⑤文化再生研究室

源流古道調査や現地踏査を実施し資源マップを作成。炭焼き窯の製造方法の調査、伝統芸能の保存など。



この源流元気再生事業の取り組みは2009年11月「NPO法人多摩源流こすげ」として引き継がれています。

「小菅村源流景観計画」策定（2011年）

源流景観計画の基本方針は、「源流らしさ」「小菅らしさ」の里づくりにあります。「源流らしさ」とは、橋立地区の掛け軸畑に象徴されるように、小菅村の自然環境の特徴である源流という環境に生かされ、またこれを育むことで維持されてきた景観です。そして「小菅らしさ」は小菅村に住む人々の生活がかもしだす景観です。

そこで「小菅村源流景観審議会」（村民、関係行政機関、学識経験者などによる）は小菅村の８つの地区それぞれで懇談会を開き、その地区の特徴、それをどう活かすかを提案してもらって「小菅村源流景観計画」をまとめました。

作成にあたっては資料提供、アドバイス等、神谷先生に大変お世話になりました。

多摩川源流自然再生推進協議会結成（2003年）

小菅村、源流研究所、流域の市民団体、東京農大、山梨県、環境省、林野庁など25団体が参加して準備会を設置。自然再生推進法に基づき河川・里山・里地・森林などの自然環境を保全、再生、創出し、維持管理する事業で、民間主導の協議会は全国で初めてとのことで注目されました。

多摩川源流協議会設立（2002年）

塩山市（現甲州市）、奥多摩町、丹波山村、小菅村の四市町村は県境を越えて協調して多摩川源流の自然環境保全と活性化に向けて連携を強化することを確認。シカの食害の実態調査、多摩川源流「水守絵図」作成しました。

巨樹・巨木など源流資源調査

小菅村長作地区の旧跡調査、小菅村の巨樹・巨木や花の調査など。

林相調査（2001年）

東京農業大学と協働で水源の森の樹種、巨木調査、標準値調査、土壌調査に取り組みました。

先進地視察

- ●大橋式路網研修（2008年　奈良県川上村）
- ●懸樋見学研修（2009年　福島県下郷町）
- ●景観先進地視察研修（2010年　群馬県川場村）

源流塾「多摩川源流百年の森づくり」始まる（2006年）

2003年から3年間、小菅村、多摩川源流研究所が実施してきた緑のボランティアによる「森林再生プロジェクト」は延べ1,658人の参加により18ヘクタールの森林整備を実施することができました。2006年からは自然再生推進法に基づいて設置した産・官・学・民の連携による「多摩川源流自然再生協議会」により、「森林再生」「源流景観」「源流文化」の視点から自然再生全体構想と実施計画が策定され、事業実施に向けて始動。「多摩川源流百年の森づくり」実施に当たり「源流塾」を開催し塾生の募集を行いました。

多摩川源流写真展

川崎、二子玉川その他流域の各地で開催を行いました。

源流探訪の旅を実施（2003年8月）

●源流古道水源林体験の旅　●源流大菩薩探訪の旅
●水干探訪の旅　●妙見五段の滝探訪　など

2003年8月30日～31日、多摩川源流ファンクラブ会員23名が参加して「第一回妙見五段の滝探訪の旅」を小菅村と源流研究所が実施しました。この滝は小菅川源流に位置し、これまで、あまり人々に知られることもなく豊かな自然に包まれ今も流れ続けています。

参加者は「感動の一言に尽きます。本当に素晴らしい。大感激。」「楽しかったです。はまりそう。」と興奮した様子で妙見五段の滝に出会えた感動を口々に語っていました。

この滝までは源流の渓谷沿いを歩いていくため危険も伴う場所、源流研究所のスタッフもフルメンバーで対応しました。無制限に立ち入りを認めて周辺の自然環境が傷つく危険もあるため、あえて一般公開しないで源流ファンクラブの会員を対象として実施しました。

31日の朝8時30分に旅館を出発してマイクロバスで林道の終点を目指します。準備体操をして源流ウォークの注意点を説明。小菅川源流域の大きな特徴は、石と岩に覆われ滑りやすく油断すると怪我をする危険箇所が多い事です。特に上りよりも下りの方が危険が多いので注意を喚起しました。9時15分に出発。砂岩の急な山道を登り、桑田を過ぎると右岸の大きな石をくぐり抜け二度三度と徒渉を振り返しながら上り詰めていく。歩きはじめて約1時間で烏小屋出会い滝に到着。シオジは北側には見事な苔を貯えていますが南向きの木肌は弱っている様子でした。このままずっと元気でいてくれと祈りつつ途中で何カ所か崩落現場に出くわす。傾斜のきつい砂岩泥岩の土壌のため広葉樹林にもかかわらず大雨には勝てないようで大木が何本も川をふさいでいました。無名滝から数分で妙見五段の滝が姿を現すと参加者から歓声と「すごい。妙見五段の滝に会えて本当に幸せ。」など感動の声が上がりました。

これまで様々な交流事業に取り組んできましたが今回の「妙見五段の滝探

訪の旅」ほど笑顔が印象に残った取り組みはありませんでした。悪条件の中でその困難を克服して目的を遂げる達成感と爽快感を参加者みんなで共有できたことが大きかったのだと思います。

行きが1時間45分、帰りが1時間10分という疲労感の残らない距離といい、そこそこの困難さといい丁度良かったのだと思う。いずれにしろ、この妙見五段の滝は源流に通い、源流に想いを寄せ、源流の神々から入山のお許しが降りた人々だけが出会える秘境です。今でこそ林道が開通し1時間45分でこの滝に出会えますが林道の通っていないときは何時間もの道のりでした。気楽に誰でも訪れることのできない場所として守り続けていきたいと感じました。

古家旅館での昼食の後は自己紹介をし、それぞれがイベントの感想と小菅村と源流研究所への想いを熱く語り合いました。ある会員の方は去年から今年にかけて10回近く村を訪問しているなど、それぞれが平均して4～5回も小菅村に足を運んでいました。その後はゆうゆうクラブの指導によるツル細工、竹細工に挑戦。全員がツル細工の作品を完成させ、高度な技術が必要な竹細工は指導者の手を借りて作品を完成させていました。

妙見五段の滝

この滝の名前は、廣瀬元村長から名前を提案するように要望があり、中村所長が命名

活動紹介アルバム（一部抜粋）

国土施策創発調査第3回全体会議
全国源流再生シンポジウム
（2005年3月16日）

多摩川源流大学　小菅キャンパス開校式
（2007年5月20日）

源流元気再生事業
木づかい研究室　ろくろ体験研修会
（2010年3月14日）

第1回　全国源流サミット in 道志村
（2010年10月23日）

多摩川子どもシンポジウム
（2010年12月4日）

第3回　全国森林作業道研究会
（2011年9月12日）

これまでも、これからも、
源流を守り続けたい・・・

みんなで源流を守り続けましょう。

水は命　森は源　川は絆

多摩川源流研究所
15年間の歩み(2001-2016)

2020年3月 発行

編　　集：多摩川源流研究所
所長 中村 文明
株式会社 少國民社
本間 啓子(ライター)

写真提供：多摩川源流研究所
所長 中村 文明

発　　行：山梨県 小菅村

印　　刷：株式会社 少國民社

多摩川源流研究所
15年間の
歩み
2001－2016

多摩川源流研究所

15年間の歩み

多摩川源流研究所
山梨県 小菅村